

HATOプロジェクト先導的実践プログラム部門  
「へき地・小規模校教育に関するプロジェクト」  
平成26年度「へき地・小規模校教育フォーラム」

Advanced Educational Practice Program about Rural Small School Education  
Constructed by The H A T O Project in 2015

北海道教育大学では、平成17年度から札幌・旭川・釧路の教員養成課程3キャンパスに「へき地校体験実習」を開設しています。試行期も含め平成26年度までの受講生は延べ1,240人を数えます。これまでのフォーラムでも北海道のへき地小規模校における「へき地校体験実習」の成果と課題を実習生からの報告を基にして交流してきました。

平成25年度に引き続き、本フォーラムではHATOプロジェクト連携大学、さらに各大学の学生からも実習成果を発表していただき、教員養成段階における教師教育のあり方を協議するフォーラムとして開催しました。

※HATOプロジェクトとは、学生のへき地・小規模校教育への理解を深め、実践現場を体験することで、地域に根ざす教育の意識を涵養し、実践的な教育指導ができる教員の養成を行うことを目的としている。さらに、学生教育の成果やへき地・小規模校教育に関わる研究の成果を生かし、へき地教育の発展につながる取組を行うこととしている。

(HATOとは、H：北海道教育大学・A：愛知教育大学・T：東京学芸大学・O：大阪教育大学の4大学を指す。)

平成27年2月13日(金) 10:00~16:10 / 釧路プリンスホテル(釧路市幸町7丁目1)

[総合司会] 中川 雅 仁 (へき地教育研究支援部門 釧路校センター員)

10:00 開会挨拶 城 後 豊 (北海道教育大学 学校・地域教育研究支援センター長)

10:10 学生による報告I

[司 会] 戸 田 竜 也

①ポスターセッション1

菅 原 美 羽	札幌校2年(実習校:利尻富士町立鷺泊小学校)
木之内 美 香	旭川校2年(実習校:名寄市立風連下多寄小学校)
竹 森 舞 郁	旭川校2年(実習校:幌加内町立朱鞠内小学校)
志 藤 叡	釧路校2年(実習校:鹿追町立上幌内小学校)
菅 原 亜 希	釧路校2年(実習校:鹿追町立上幌内小学校)

②ポスターセッション2

米 澤 美 帆	釧路校3年(実習校:根室市立花咲港小学校)
棚 橋 桃 子	釧路校3年(実習校:根室市立花咲港小学校)
伊 畑 智 波	釧路校3年(実習校:釧路町立昆布森小学校)
佐 野 圭 介	釧路校3年(実習校:釧路町立昆布森小学校)

③ポスターセッション3

澤 田 香 穂	札幌校4年(実習校:幌加内町立幌加内小学校)
工 藤 美 季	釧路校4年(実習校:標茶町立沼幌小学校)

[講 評]

鹿追町立上幌内小学校長	原 見 寿 史 氏
北海道立教育研究所	
企画・研修部長	鈴 木 淳 氏

12:50 学生による報告Ⅱ

[司 会] 西 村 聡 (へき地教育研究支援部門 釧路校センター員)

①大阪教育大学：HATO連携大学における多様な実習と学び

・「遠隔地実習」

糺 佳 苗 2年 (実習校：三重県津市立川口小学校)  
西 尾 俊 祐 2年 (実習校：三重県津市立川口小学校)  
馬 場 京 子 2年 (実習校：愛知県西尾市立佐久島小学校)  
大 島 健 人 2年 (実習校：愛知県西尾市立佐久島小学校)  
藤 本 凌 平 2年 (実習校：愛知県西尾市立佐久島小学校)

②東京学芸大学：HATO連携大学における多様な実習と学び

・「東京学芸大学の一般的な教育実習を振り返る

(墨田区立桜堤中学校STボランティア経験を通して)」

小 林 拓 哉 4年 (実習校：東京都墨田区立桜堤中学校)

・「東京学芸大学の島実習より、教育を再考する」東京学芸大学

鯨 坂 恵 理 4年 (実習校：東京都大島町立つばき小学校)

③愛知教育大学：HATO連携大学における多様な実習と学び

・「1年半の学校サポーター活動を振り返って

(実習名：学校サポーター、教師力向上実習 実習校：愛知県みよし市立黒笹小学校)」

石 川 恵 理 (教職大学院) 2年

・「在日外国人の学習はどのように進められているか

(実習名：特別課題実習 実習校：愛知県豊田市立東保見小学校)」

今 村 真 弓 (教職大学院) 2年

[講 評]

北海道教育大学 学校・地域教育研究支援センター

へき地教育研究支援部門 函館校センター員 阿 部 二 郎

14:40 研究協議

[司 会] 廣 田 健 (へき地教育研究支援部門 釧路校センター員)

①基調提案

『多様な教育実習導入の意義と教員養成の質保証

- 北海道教育大学におけるへき地校体験実習の取組から -』

北海道教育大学 学校・地域教育研究支援センター

へき地教育研究支援部門主任センター員 川 前 あゆみ

②協議

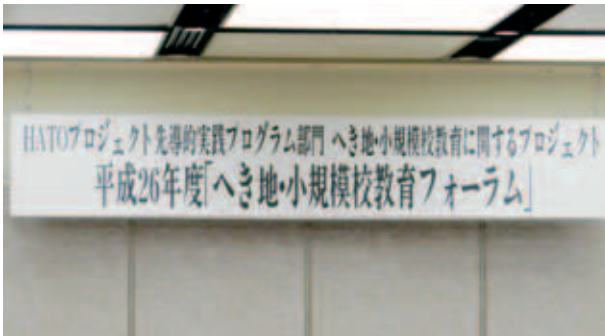
愛知教育大学 教授 中 妻 雅 彦 氏 (HATO連携大学)

東京学芸大学 教授 鉄 矢 悦 朗 氏 (HATO連携大学)

大阪教育大学 准教授 馬 野 範 雄 氏 (HATO連携大学)

[閉会挨拶] 八 木 修 一 (へき地教育研究支援部門長)

## HATOプロジェクト先導的実践プログラム部門 「へき地・小規模校教育に関するプロジェクト」 平成26年度「へき地・小規模校教育フォーラム」



総合司会：中川雅仁

（へき地教育研究支援部門 釧路校センター員）

ただ今より、平成26年度「へき地・小規模校教育フォーラム」を開催致します。

まず開催にあたりまして、学校・地域教育研究支援センターのセンター長であります、城後豊センター長より、開会の挨拶を頂きます。よろしくお願い致します。

### 開会あいさつ

城後 豊

（北海道教育大学 学校・地域教育研究支援センター長）

皆さんおはようございます。今日は全国から遠路はるばる北海道の東の釧路までお見えになっていることと思います。

このへき地の小規模校教育フォーラムは、本学の目玉でございまして、非常に特色化と機能強化を図る教員養成としては、必要不可欠な課題でもございます。恐らく今日ここに集まりの皆さん方もご理解されていると思いますけれども、いわゆる全国のへき地小規模校が非常に少子化のあおりを受けて、小学校そのものが、また中学校そのものが小規模化した、また統廃合という様々な課題を抱えた状況が、どの都道府県でもあるということをお聞きしています。

このへき地・小規模校研究につきましては、本学は非常に歴史が長い研究母体でございまして、ずっと北海道教育

大学の中心的研究教育の課題でもございます。当然北海道の地域性からしましても、40%近くがへき地小規模校を抱えているという状況が北海道地域にはございまして、その中でも複式が20%あるという、非常に必要不可欠という意味ですが、そういう人材養成をしていかなければならないという課題が、大学にも課せられている状況がございます。本日、この会場には愛知県、大阪、東京というHATOプロジェクトのメンバーの方々がお集まりですが、ただ、へき地ということじゃなく、都会型の小規模校も中にはございまして、統廃合を止むを得なくやらなきゃいけないような状況がある中で、それでいいのかどうかという課題を発信し続けながら、1つの教育の効果というものを、また質の向上というものを進めなければならないという、大きな課題があるということを考えている状況がございます。

少しこのプロジェクトそのもののお話しますと、HATOの名称でございまして、北海道がH、Aが愛知教育大学、Tが東京学芸大学、Oが大阪教育大学でHATOというプロジェクトを3年前に教員養成系大学の大手といましようか、1000人以上の1学年を抱えている大学が連携して、教員の資質向上も含め、教員養成の人材育成における一つの地域の特色を生かしたプロジェクトを作ろうじゃないかということで立ち上がったプロジェクトでございまして。文科省もこのことについては凄く応援を下さいまして、全国に48の教員養成系大学がありますけれども、単科の教員養成大学は11ございます。その中でも先程申しましたように、1000人規模で1学年養成している4つの大学が幾つかのプロジェクトを組み立てまして、3年目を迎えているということでございます。それをとってHATOプロジェクトという名称で進めている状況でございます。文科省が非常に期待していることは、学生さん達の、いわゆる教員になる人達の人材育成ということで、非常に授業を含め、意識の高揚も含め、教員になりたいという1つのプロジェクトがたくさん目白押しでございまして、北海道の我が大学では、3つのプロジェクトを持っている状況でございます。その1つがこのへき地・小規模校のプロジェクトでございます。

2つ目は、小学校英語のプロジェクトを組み立てて、ご存知のように、2020年からは小学校の学科化が始まりますので、もう移行措置が来年度から始まるということをお聞きしております。完全実施が2020年でございますので、そういうことも先取りしてやっている状況が、これも歴史的にずっと本学では、釧路校の附属学校等々で連携プロジェクトも組みながら、成果を上げている状況でございます。

3つ目はコミュニケーションの、いわゆる表現能力が教員養成としては必要だろうということで、演劇を中心とした表現能力を培う、身体表現を通して表現力を高めようじゃないかというようなプロジェクトでございます。

こういう様々な大学の特色、また地域の色んな課題を背負ってやっているプロジェクトでございまして、今日は冒頭でも言いましたように、へき地小規模校というのは、本

学が非常に自信を持って進めてきているプロジェクトです。歴史的にも歩みが長い研究教育の1つの中枢となっております。とりわけ釧路校の先生方が一生懸命取り組みをなされているという成果が、少しずつ出ている状況でございまして、今後恐らくうちの大学の中核的な教育研究の柱になっていくだろうと思います。HATOプロジェクトを通じて全国化、或いは、今大学ではグローバル化が必要になってきていますので、東南アジア等々の、いわゆる発展途上国と言われる部分でのへき地小規模校がたくさんございますので、そういう目も向けた発信を北海道から進めることが必要ではないかということ課題としては持っています。それを地球規模と言ったら大げさになるかもしれませんが、そういう発想がこれから要求されてくるであろうし、文科省もそういうことを期待しているようでございます。

HATOと関わって、今日のプロジェクトではこのHATOプロジェクトの中で、最も活気的な企画が組まれていることです。それは、学生発表を中心に行っているからです。これは今までは教員だけが話し合いの場に参加していて、なかなか学生達が可視化しないというか、表面に出てこないということがございました。そうした意味では、スチューデント・ファーストという、いわゆる学生主体の教育が柱になっていますので、今日本当に遠くから来て頂いて有り難く思います。また、その学生達も実際の取り組みを発表してくれます。いわゆる実践的指導能力というのが盛んに言われている状況でございますので、現場を見て、それをまた現場に返してあげるという取り組みでございますので、非常に学生さん達大変だと思いますが、よろしくお願ひしたいと思ひます。

またここには、先程も申しましたように、釧路校を中心にして、それぞれ担当の関係者の先生方が頑張つてこの企画を取つたようでございますので、よろしくお願ひしたいと思ひますし、また北海道立教育研究所から、企画・研修部長の鈴木淳様や、実習協力校からは鹿追町立上幌内小学校校長の原見寿史様がお見えになって、色々ご指導を頂くということです。また、HATOプロジェクトメンバーの先生方もここにご参集頂いて頂いておりますので、色々ご意見を頂きたいと思ひます。

簡単でございますが、ご挨拶ということで、今日、明日、またよろしくお願ひしたいと思ひます。

#### 報告 I 司会：戸田

それでは、早速報告 I です。北海道教育大学学生による、へき地校体験実習の報告を始めさせていただきます。この時間司会を担当致します、へき地教育研究支援部門の戸田でございます。よろしくお願ひ致します。

北海道教育大学では、へき地校体験実習という名称で、北海道内のへき地小規模校に出向き、その地域に1週間から2週間滞在をして、教育実習を行っております。そこでは実習校から複式学級での授業の進め方や、少人数指導等を実地に学ぶと共に、地域の人達や保護者との交流からも、

地域における学校の役割等、たくさんのことを学ばせて頂いております。

本日は札幌、旭川、釧路の教員養成3キャンパスの学生11名からこの時間報告をして頂きます。



〔各ブースでのポスターセッション〕

#### 学生による報告

〔報告者〕竹森 舞郁 旭川校2年次

実習校：幌加内町立朱鞠内小学校

旭川校国語科教育専攻2年目、竹森と申します。よろしくお願ひします。

私は今回のへき地校体験実習で、幌加内町立朱鞠内小学校へ実習に行きました。まず私がこの学校を希望した理由をお話します。理由の1つは、子どもと関わる機会が欲しかったからです。旭川校では2年生で基礎実習があり、3年生では5週間の教育実習がありますが、基礎実習では授業の参観がメインであり、日数もとても少ないです。そこで実際に子ども達と関わってみたいという気持ちがあり、この実習を希望しました。2つ目の理由は、北海道で教師をやりたいと思っているからです。北海道にはへき地校や小規模校がたくさんあるので、将来教師になるにあたり、この実習でたくさんの方が学べるだろうと考えました。

今回の実習の目標として、積極的に子どもと接すること、先生方の仕事をよく観察することの2点を掲げました。子どもとたくさん関わることでしか学べないことはあるだろうし、5日間という短い時間だからこそ、たくさん関わるためには自分から働きかけなければいけないなと思いました。しかし、普段の生活では自分より下の学年の子ども達と関わることなどが無いため、どのようにして子どもと関わればいいのか等を学ぶためにも、先生方の心掛けていることを知ることが1番勉強になるのではないかと思います。この2つを心掛けることを決め、5日間の実習に臨みました。

それでは、実際に行ってきた朱鞠内小学校の紹介をしていきます。幌加内町朱鞠内とは、士別から車で1時間程度の場所にあります。幌加内町なのですが、その町の中心までは車で1時間以上掛かり、周りにはコンビニすらありません。日本一の積雪地域であり、冬には2メートル以上の雪の壁が出来るそうです。自然条件が非常に厳しく、交通機関もあまり整っていないため、車のみでの移動となってしまいます。自然条件は厳しいのですが、同時にとても自

然豊かで、日本最大の人造湖の朱鞠内湖ではイトウやワカサギ釣り等を楽しむことができます。今挙げている写真は、今回の実習中に行った遠足の写真です。遠足では朱鞠内湖での釣り体験をしてきました。このような釣り体験が出来たのは、朱鞠内湖を管理している方と学校の連携が取れているためです。とても小さな地域のため、人と人の繋がりが強く、私達もその繋がりの強さに大変助けられました。

朱鞠内小学校では、情熱、優しさ、勇気、笑顔でいきいき朱鞠内っ子を教育目標に様々な活動に取り組んでいます。全校児童は10人ととても少なく、教員も校長先生を始め、教頭、教諭2人、事務補、校務補と大変少ない人数でした。しかし、その少ない人数を生かした、朱鞠内ならではの活動がたくさんありました。先程紹介した遠足もそのうちの1つです。春にはイトウの採卵体験、夏には遠足の釣り体験、冬にはワカサギ釣りと朱鞠内湖での体験学習を行い、また、わんぱくの森と題し、春夏秋冬には近くの山での自然活動も行っています。これらの活動を行うために、地域、保護者の方々と常に連携を取りながら教育活動を行っています。今回行った遠足でも地域の方々のご協力のもと、釣り体験等が進められていました。幌加内小学校とも連携もしながら教育活動が行われており、そば打ち体験等、幌加内町独自の文化にも触れています。また、全校で体力づくりに取り組んでおり、マラソンや一輪車、ミニバレー等を休み時間や放課後の時間に行っています。教員と子どもだけでなく、地域、保護者が1つになって教育活動を行っている学校です。

子ども達との触れ合いの中で感じたことは、朱鞠内小学校の児童はとても思いやりのある子どもだということです。六年生だけでなく、子ども達皆が下級生の面倒を良く見ており、小規模校ならではの思いやりの心が育っていると感じました。私達実習生に対しても思いやりを持って接してくれて、5日間の実習を頑張れたのは、子ども達のお陰でもありました。また、体力向上に努めていることもあり、とても元気な児童で、一緒に走り回するには体力がついていけなくなるぐらい毎日遊んでいました。その姿はとても可愛く、毎日子ども達から元気ももらっていました。

5日間の間、毎日配属された教室や、違う教室の授業を見学させて頂きました。音楽や体育等では、少人数ならではの授業形態がとられており、少人数というのは決してデメリットではないということが分かりました。国語や算数等では複式の形態がとられており、特に複式指導に十分慣れていない1、2年生では、間接指導の際に集中出来ないことも多く、低学年に対してわたりやずらしを行うことの困難さが良く分かりました。1、2年生の教室ではパソコンを使用した自主学習を行っていました。子ども達はゲーム感覚で学習をしており、ITの利用は学習の意欲の向上に繋がっているなど感じました。朱鞠内小学校では表現する力を付けるという、統一された目標のもと授業が進められており、実際に授業の中でも1時間に1回は必ず発表する機会が設けられていました。

今回の実習では教壇実習をさせて頂きました。教壇授業は水曜と木曜に1回ずつ、1、2年生の算数の授業をさせて頂きました。木曜は研究授業ということで先生方全員に見て頂き、アドバイスも頂きました。今回の教壇実習で初めて複式授業の指導案を書いたのですが、間接指導では何をすればいいのかということに、とても頭を悩ませました。授業の展開等は教科書を見ながら考えることが出来ましたが、それをどこまで直接教えるのかや、どのくらいの時間を掛けてやればいいのか等を考えることはとても大変でした。最初に授業をした時は、複式授業の大変さも勿論ありましたが、課題を設定してもこちらの意図とは違うところに集中してしまったり、指示が曖昧だったため、やって欲しいことが伝わらなかつたりと、初歩的なところから反省点がたくさんありました。研究授業の反省会では、声の大きさ、速さについて指摘され、何よりも子ども達の配慮を払うことが大切だということが、身をもって学ぶことができました。また授業をする際は、子どもとの信頼関係が大切だというアドバイスも頂きました。結局は普段の子どもとの関係性が授業に現れてくるので、日常の学級経営を通じた児童理解や、生徒指導等が極めて重要であることを知ることが出来ました。

実習中は学校の目の前にあるコミュニティセンターに泊まりました。車で40分ぐらい走らないとスーパーもコンビニもなかったので、1週間分の食糧を持ち込み、もう1人の実習生と協力して自炊を行いました。入浴施設は近くに2箇所あり、どちらも保護者の方々が経営している施設だったため、学校とその方々のご厚意で、無料でお風呂に入ることが出来ました。毎日子ども達と走り回り、自炊し、12時ぐらいまで記録や実習指導案等に追われ、なかなか大変な5日間でしたが、お互いの撮った写真を見て癒されたり、子ども達のエピソードで盛り上がりたりと、辛いながらも楽しい生活を送れました。5日間を通し、保護者、地域の方、先生方、そしてもう1人の実習生の温かさが身に染み込んだ5日間でした。

この実習では初めての教壇実習で授業の大変さが分かったり、現職の先生方の仕事の様子を実際に見たりして、多くのことを学ぶことが出来ました。また、地域や保護者の方々とその繋がりの大切さ、そして友達と協力することの大切さを知り、人の温かさに触れることが出来ました。そして、何より子ども達がいるから頑張れる、子ども達のために頑張れるといった、教師をやっていく上での原動力は子どもにあるということをも身を持って体験することが出来ました。たった5日間の実習ですが、本当に多くのことを学ぶことが出来ました。今回の実習を通して教師になりたいという気持ちがより一層強くなったので、これからの大学生活においても人とその繋がりを大切にしながら、これまで以上に勉強を頑張っていこうと思います。以上で報告を終わらせて頂きます。ご清聴ありがとうございました。

〔報告者〕佐野 圭介・伊畑 智波 釧路校3年次

実習校：釧路町立昆布森小学校

歴史学研究室の佐野圭介と授業開発研究室の伊畑智波です。よろしくお願ひします。実習校の概要については、このようになっております。3・4年生と5・6年生が複式学級になっており、私佐野が5・6年生の高学年、伊畑が3・4年中学年を担当させて頂きました。この図から見て分かるように、中学年の方が男子2人に対し、女子7人、高学年が男子9人に対して、女子3人ということで、非常に男女比率が分かれている学級編制となっています。実習校の場所ですが、この青い点が釧路駅、赤いピンがドロップされている点が昆布森小学校になります。距離的には16キロ程で、車で30分程で行ける距離にありますが、景観は全然違います。これからも出てくると思いますが、非常に自然が豊かな場所で、初めて行った時は僕自身もびっくりしました。

家庭・地域の特色を紹介します。昆布森小学校の保護者の職業の約76%は漁業に従事しています。学校の窓からは海を眺望することも出来ます。7月に磯の観察学習という、地域の自然を利用した学習が行われています。昆布森で特に盛んなのは、昆布漁とサケ・マス定置網漁です。夏にはこのように昆布漁を子ども達も手伝って、休日早起きをして、昆布を干す手伝い等を行っています。昆布干しは子ども達にとって当たり前のお手伝いの1つとなっております。

次に実習中にあった行事を紹介します。まず、全校給食がありました。1年生から6年生が1つの教室に入って給食を食べるといふ、小規模校ならではの行事だと思ひます。実習期間に丁度、ふるさと給食がありました。写真がなくて申し訳ないのですが、この日は、釧路町の海藻をえさにして育てた豚を使った豚丼がメニューに出ていました。あとは、昆布森のサケを使ったサケの南蛮漬けやサーモンカレーなども、他の日ですが、子ども達にとって人気のメニューでした。

次に観察実習についてです。私は3・4年生の中学年に入らせて頂きました。給食時間はこのように必ず円になって、給食を食べるようにしています。3年生にダウン症の子がいました。その子が給食の片付けとか、階段を上り下りする際に、他の子ども達が自然と手を貸してあげたり、ごく自然にその子の生活をサポートする姿が見られました。このように思いやりのある学級づくりが子供同士の学び合いを生かした授業に役立っていると、担任の先生から教えて頂きました。

続いて高学年の観察実習の様子を説明します。高学年の進め方ですが、同時間接授業という進め方を担任の先生がしていらっしゃいました。これは児童にほぼ全ての授業進行を任せる、教師が指示を出すのは基本的には導入場面の課題提示とまとめだけです。黒板の前に立って、黒板を使うのも大体、導入とまとめだけです。この方が担任の先生です。これは授業中です。これは普通に子どもが1人学習をしている時間なんです。クラスに「学習の進め方」を模

造紙に書いた表があります。児童はこれにのっとして、教科の学習リーダーがこれにのっとして、自分達で授業を展開していく形になっています。算数を例にしますと、まず一方の学年が前時のプリント学習をします。その間にもう一方の学年に先生が課題を提示します。その後は、学習リーダーが1人学習を指示して、交流、そしてまとめの部分まで全部子ども達が自分達で議論、考察をしています。その間先生方はそれとずらして、もう一方の学年に課題提示。そしてそこから、1人学習、交流、まとめが、丁度先生が干渉しない時間になります。この時間帯に先生は、両学年を見取ります。例えば5年生でこうしたところが分かってない子に対して、ささって行ったり、一方では6年生で困っていることがあったら、こっちにささって行ったり、これが凄く間接授業でレベルの高い授業を拝見することが出来ました。

次に研究授業についてお話します。私は3年生で二等辺三角形、正三角形。4年生で180°よりも大きい角という単元で授業をさせて頂きました。私、教壇実習では凄く指示が曖昧になってしまつて、間接指導で子ども達が次に何をしたらいいのかわかっているのが、分からなくなつてしまつた場面が何度もありました。そこで研究授業では、間接指導前の指示を紙に提示して、子ども達の前に出すようにしていました。そうすることで、こちらからの補助発問がなくなつて、結構子ども達の様子を観察しながら授業をすることが出来ました。特に4年生は、1人の女子がつまづいているのを皆でサポートする姿が見られました。この男子は教える中で、自分が分度器の使い方が間違つた使い方をしていたことを自分で教えながら気付くという場面も見られました。

続いて高学年の社会の研究授業を説明させて頂きます。単元は5年生が「自動車会社を訪ねて、自動車が届くまで」の単元。6年生が「2つの戦争、日本とアジア、平等な社会を目指して」であります。5年生の導入の部分は、教科書通りに進めても面白くないと思ひまして、全国の工業地帯が港に集中している模造紙を見て、まず子どもが、港にそういったものが集中しているっていうのを掴ませた上で、「どうして港にそういった施設が集中しているのかな」という導入をして、そこからさっきの先生のやり方でやってみようと思ひました。同時間接指導を実践してみました。6年生の方でも同様にやつたのですが、僕は5年生の方に偏つて指導をしてしまひまして、大体授業の3分の2ぐらいを5年生の方に入つてしまつたんです。授業後の研究協議の反省で、6年生の方にもっと入れたら良かったかな、というアドバイスを頂きました。やはり、どつちかの学年に傾倒してしまうことが起きてしまうのが、複式授業の難しさだと実感することが出来ました。また、実は6年生の方にはあんまり入れなかつたんですが、6年生の方が学習リーダーを中心に、自分達で出た意見を黒板の方にまとめていました。非常に子ども達に助けられた研究授業となつてしまひました。

へき地校体験実習を終えての全体の感想です。主免実習と比べて、楽しさや難しさを感じる事が出来ました。まず授業面では、1時間に2学年の授業を考えるということで内容も2倍なので、教材研究が不十分になってしまいました。また単式学級にはない、わたり、ずらしをどこでするかということも同時に考えるので、授業づくりに関しては正直、苦戦をする毎日でした。生活面では上の子が下の子の面倒を見て、学校全体が家族のような温かい雰囲気の中で包まれているのを先生という立場で感じることができました。私はへき地校出身ですが、身近に異年齢の友達がいる生活は当たり前だと思っていたんです。主免実習を終えて、初めて1人1人と関わる環境の貴重さに気付くことが出来ました。

最後、僕からの感想ですが、子ども達の繋がりや深さは、先程、伊畑の方で説明したので、高学年が低学年を見てあげているという図が非常に印象的でした。一番僕が思ったのは、同時間接指導の難しさです。一方の学年に傾倒してしまっただけではいけないので、僕が重要と個人的に思ったのは、一方の学年の議論が盛り上がってきたときに、学習リーダーにどう声掛けをするかという教師の動きが重要だと思いました。これは実際担任の先生も学習リーダーに、「こうした方がいいんじゃない。」といった指示で落ち着かせていました。このような授業の進め方を児童に定着させるには、長期的な指導が必要です。先生は1年生の時に担任していたクラスがそのまま5・6年生となってきたので、これは本当に小さい学校ならではだと思えます。クラス替えがない状態で、1年生の段階から長いスパンをかけて、こういった授業の進め方を定着させることが出来るという点が、非常にへき地小規模校教育の良い点だと思いました。少し長くなってしまいましたが、以上で発表を終了させていただきます。ご清聴ありがとうございました。

〔報告者〕澤田 香穂 札幌校4年次

実習校：幌加内町立幌加内小学校

発表を始めさせていただきます。北海道教育大学札幌校4年目の澤田香穂と申します。よろしくお願ひします。

私は今回、幌加内町立幌加内小学校にへき地校体験実習に行かせて頂きました。私以外に4年生の人が1人と2年生の人が1人と、合計3名で実習に臨まさせて頂きました。私自身は2年生の時にへき地校体験実習に一度行かせて頂いていて、2年生の時は土別市立糸魚小学校というところに、1週間の実習をさせて頂きました。3年生では札幌市内の小学校に5週間、4年生の9月上旬にこの幌加内町立幌加内小学校での実習、そしてこの1週間後に函館にありますが、北海道教育大学の附属特別支援学校で特別支援教育の実習をさせて頂きました。

まず、今回の実習の幌加内小学校なんですが、北海道の雨竜郡というところの幌加内町にあります。札幌から北にだんだん上がって行くところにあります。幌加内というのは、日本で最もそば粉の栽培をしている地域でありまして、

そばの里というふうに言われています。幌加内そばが有名です。幌加内小学校の児童の実家の中には、おそば屋さんをしているお家があったりですか、この幌加内小学校の児童自身もおそばが大好きで、1番最初に実習生が行って自己紹介をしてその後に、うどんとそばどっちが好きですか、と。もう、そばと言わざる得ない状況を作り出されるくらい、本当に自分達の里のおそばが大好きというふうに言われています。

次に、学校概要です。児童数はスライドの通りになっています。私は6年生の学年を担当させて頂きました。学校の中では最も多い17人ということでした。へき地級、先程も示しましたが2級になっています。全て単式学級です。複式学級はないですが、特別支援学級も数年前まではあったようなのですが、今はありませんでした。その代わり学年の中に数人、支援の必要な傾向が見られるお子さんがいたかなというふうに思います。

こちらが校舎になっています。正面玄関前に二宮金次郎の像がありまして、その前にグラウンドがあってマラソン練習をしたりしていました。

こちらは5年生の教室の写真なんですが、学年によって座席の配置ってというのは異なりました。5年生は9人、女の子の学級だったので、この9人でグループ活動というのが主体となって授業をしていたようです。

次に、実習中の生活なんですが、まず1番最初に移動日、8月31日日曜日だったのですが、この頃丁度、幌加内の新そば祭りというのが開催されていて、2日目です。私達は札幌から車で4時間程度かけて、幌加内まで行きました。初日は早めに行って、そば祭りの様子をちらっと見てきました。これが幌加内小学校の子ども達のよさこいの演舞なんですけれども、4年生以上の子ども達が全員でよさこいを披露していました。学校で練習をしてから臨んだそうです。皆でやることに意味がある、というふうに先生はおっしゃっていたんですけれども、皆で頑張って踊っていました。

ちょっと戻りまして、実習は翌日の9月1日からスタートしました。生活改善センターというところで宿泊をさせて頂きました。1階の部分がそば道場になっていて、その2階部分で生活をさせて頂きました。本当は最終日まで生活改善センターでお世話になる予定だったんですが、生活改善センターの2階部分では、地域の行事というか、お葬式とかがあったら移動する可能性もあるとは事前に言われていました。まさかその時期に当たりまして、お葬式があるということで、3日の水曜日に移動しまして、生涯学習センターあえる97というところで宿泊をさせて頂くことになりました。入浴はお風呂がなかったので、ルオントという温泉に車で毎日15分ほどかけて行っていました。

先程示したこちらが、そば祭りのポスターとよさこい演舞ですね。そば祭りは幌加内の人口が1万3千人程に対して、2日間の来場数というのが、5万人を超える、かなり大きなおそばのお祭りになっているようです。観光客の方

も凄くたくさんいらっしゃいました。

次に、先程宿泊施設について説明させて頂いたんですが、生活改善センターから生涯学習センターです。どちらも自炊をする生活でした。ちなみに1番最初に宿泊させて頂いた、この生活改善センターというところ、宿泊所の隣のところは児童館になっていて、幌加内小学校の子ども達によく、私達が学校から帰ると、あっ先生だ、と声を掛けて頂いたりですか、後はお子さんを迎えに来ている保護者さんとお話させて頂いたりとか、というふうな経験がこちらの施設では出来ました。更に5分程かかったところに、あいる97というところがあって、ここは凄く新しく、とても綺麗な場所でした。

実習中なんですが、マラソン練習をほぼ毎日行っていました。というのも、私達実習の最中にはなかったんですが、その1週間後にマラソン大会が幌加内町であるようで、先程の朱鞠内小学校の方も来るそうですが、そういう地域の幌加内にある小学校さんや、地域の方々が参加する大きなマラソン大会があるということでした。その地域のためのマラソン大会の練習をしていました。マラソン大会の練習では、私も一緒に走って、校舎の周りをぐるーっと周ったりですか、地域の周辺を周ったりというようなコースがあったんですが、最後の方を走っている、ちょっと足が遅くなってしまった子どもに声を掛けたりですか、そういう活動を行って行きました。

次に、研究授業についてです。こちら1年生なので私ではないんですけども、幌加内小学校の研究教科というのが算数ということで、全員が算数の研究授業をさせて頂きました。1年生では10より大きな数ということで、算数の授業を行っていました。導入で子どもを引きつけることが出来た、見通しを子どもに持たせることの難しかったというふうにあります。次に、写真を見て頂いたら分かるかなと思います。チョコレートを頑張って教具として作って、子ども達に示すですか、こちらの写真では見えないですけども、担任の先生の顔の似顔絵を描いて、子ども達の笑いをとって導入で引き付けたりということをしていました。

続きまして、もう1人の2年生の方は、5年生の担当だったんですけども、単分量あたりの大きさということで、平均から合計の量を求めるという活動をしました。感想としては、色水と升というのを実際に使って、作業を行うというふうに工夫することが出来たということです。この2年生の子は、主免実習等の実習をまだ1度も行っていないので、初めての实習ということで、先程教室の写真の時にも言ったんですが、女の子9人の学級だったので、凄くこの子ども達が実習生のことを応援してくれて、先生頑張って、というふうな声掛けをよく掛けていて、凄く子ども達に助けられた実習だったというふうに言っていました。

続きまして私です。6年生の授業をさせて頂いて、単元としては、算数の円の面積というところをやらさせて頂きました。円を分解し、平行四辺形のように組み合わせて面積

の求め方を考えるという、円の面積の公式を使って求める、一段階前の授業だったんですが、実際に教具を私も作ってその実物を用いて、円をひっくり返して、組み合わせて、箱に入れる、収めるという作業をするために、子ども達が試行錯誤する活動を取り入れることにしました。

活動を通して何を学ばせたいのかというのを明確にして、どこまでの指示や発問をするのかっていうことを考えることが凄く難しかったなというふうに思いました。私はその45分の中で、あれもやってこれもやってというふうに考えてしまうと、とても早口になってしまう癖があったので、その45分の中で、どんなことを伝えたいのかっていう言葉を精選して授業することに凄く苦勞しました。どのように話を聞かせるかというのではなくて、子ども達にどういふふうに聞こえているのかなっていうのを考えるといいんじゃないかっていうふうに、先生にもアドバイスも頂いて、客観的に自分の授業を見れるようにっていう点に気を付けて、授業をさせて頂きました。これが研究授業です。

その他にも国語の授業を3回ほどさせて頂きました。これは、春はあけぼのの授業をさせて頂いたんですけども、こちら春の写真なんですけれども、こういった季節、詩に合う写真を用意して、視覚情報等からこの情景をイメージして、現代語に訳を試みようというようなことをしました。

6年生の子どもで、へき地の子は、私の2年生の頃のへき地校実習体験のときは、本当に純粋な子ども達が多くて、あっ、へき地の子ども達ってこうなんだなって思っている面が多かったんですが、この学校の6年生の子達は、子ども達同士のいざこざもあったようで、大人に対しての警戒心ですか、なかなかコミュニケーションを取ることっていうのが、最初の方は難しかったです。国語の授業を最初からさせて頂く間に、使ったワークシートを回収して、そこに平安時代のマメ知識というのをそれぞれ違うことを全員に書いて返してっていう作業等をして、これは少人数だからこそ出来たんじゃないかなと思うんですが、こういうふうに直接関わるだけではなくて、そういったワークシートに書き込みをしたりっていう面で関わり作って、コミュニケーションをとってこうと工夫して行きました。

実習を通してなんですが、登下校の際には、私達も宿泊施設からは徒歩で学校まで通っていたんですが、小学生は勿論、中学生やすれ違う地域の方々も挨拶をしてくれました。教育実習生や教師としても、常に見られているっていう責任ですか、自覚というのを持って実習に臨むことが出来たかなと思います。

最後なんですが、実習生通信というのを outsending 頂きまして、こういった自己紹介ですか、感想ですかを書いて、全校生徒に配布しました。去年、一昨年も幌加内小学校に実習生が行っていたんですが、去年とか一昨年の実習生通信を持ってきて、子ども達が、これ去年のだよっていうふうに見せてくれたりとか、子ども達は凄くこういうものに対して楽しんでくれているというか、そういうところ



があったなというふうに思っています。この辺で発表の方を終わらせて頂きたいと思います。ありがとうございました。

#### 報告Ⅰ 司会：戸田

それではこれから、15分程度の限られた時間ではありませんけれども、全体の討議に移らせて頂きます。只今のポスターセッションでは、教育大の11名の学生、8校から報告がございました。この各学校、或いは各学生に対しての質問やご意見でも構いませんし、或いは報告全体に対してのご意見やご感想、或いは質問でも構いません。時間が限られておりますので、限られた範囲で何か出して頂ければと思います。なかなか口火を切るのは難しいかと思うのですが、もしご発言頂ける方がいらっしゃいましたら、挙手をお願い致します。いかがでしょうか。なかなか、やはり難しいですかね。

それではちょっとこちらからご指名をしまして、ご発言を頂ければと思っております。各ブースで大変色々たくさんご質問を頂きました、札幌校の今先生、恐縮ですがお願い出来ますでしょうか。

#### 今（北海道教育大学 札幌校）

教育大学の札幌校におります、今でございます。たくさん質問したというのではなくて、昨年私が必修の授業で教えていて、頑張っていた学生さんが、またこのへき地実習の方に行き、色々な学びをしていたので、つい懐かしくなってしまう、多くのことを聞かせて頂いたというのが実際であります。1年生で学び、そして、2年生になってからへき地の方に出掛けて行く。まだまだ実際の学校の現場というのを知らない中で、どういったようなものを獲得して帰って来てるのかなと同時に、若い感性で学びをどのように自分なりに授業の内容を深めていったのか、つい聞いてしまいました。

もう1つ、私自身が実はこの北海道教育大学の方でこの実習を進めております、学校地域教育研究支援センターの生涯学習地域連携部門の方に所属させて頂いておまして、今日は学校支援部門長の杵淵先生も一緒にさせて頂いて、一緒にこちらに参っているんですけども、地域と繋がりがながら、また、地域と生涯学習と共にあるだろうと私自身は考えている、へき地小規模校。その実態について、学生さんがどれだけ迫ったことになっているのか、へき地小規模校ならではの特色ある教育の内容をどれだけ学んでいるかと同時に、それを支えている地域であるとか、またその地域の中にある学校というものをどれだけ学生さん達が掴んで帰って来られてるのかなというのが、非常に気に掛かったものですから、そういう観点も含めて聞かせて頂きました。恐らく、札幌のような大きい街場で5週間の中の実習では、なかなか地域の顔が見えないのではないかと、そういう意味でその地域の中の学校というようなものを、また地域の社会教育等々との連動、そういったようなものをどこ

まで掴めたのかなと非常に気になりながら聞かせて頂きました。やはり1週間という短い中では、なかなかそういうところまで踏み込むのは難しいのかなと。2週間とか長くなってくるとその辺りに少しずつ入って来れるのかな、というようなことを感じながら各学生さんの報告を聞かせて頂きました。

#### 報告Ⅰ 司会：戸田

今先生、どうもありがとうございました。では他にご発言頂ける方、いらっしゃいませんか。後ほど発表の予定がありまして、緊張されているかもしれませんが、大阪教育大学、東京学芸大学、愛知教育大学の学生の皆さんにも、是非感想等を教えて頂ければと思いますが、どなたかいらっしゃらないでしょうか。もし、学生さんでいらっしゃらなければ、先生方も後ほど全体の協議はございますけれども、中妻先生、鉄矢先生、馬野先生、もしどなたかでご発言を頂ければと思っておりますけれども。では、馬野先生お願い致します。

#### 馬野 範雄（大阪教育大学 准教授）

今日頂いたレジュメの黄色の中紙の後に、標茶町立沼幌小学校の学生さんが、これまでの実習が上手く、2年次から4年次へ繋がっている感じの図を入れてくれています。今日発表を色々聞かせてもらいながら、ある学生は2回生で行き、ある学生は4回生で行ったとか、色々な話を聞くんだけど、2年で行ったり3年で行ったりと、これは一体どうなってるのかなと思いつつ聞いていました。改めて2年次から4年次へ、主免とか副免とか、或いは特別支援実習とか、どういう理念というか、目標のもとに積み上がっているのか、ちょっと概要を説明して頂けると、僕も助かるかなと思っておりますので、よろしくお願い致します。

#### 報告Ⅰ 司会：戸田

この実習の概要についてですけれども、どなたで回答致しましょうか。川前先生。

#### 川前あゆみ

##### （へき地教育研究支援部門 釧路校主任センター員）

北海道教育大学釧路校の川前です。へき地研究支援部門の主任センター員を務めております。私の方から概要というところでご説明させて頂きます。まず1年生の時には沼幌小学校ということでしたので、釧路校を事例に取り上げてみますと、1年生の時からは実地実習ではフィールド研究といいまして、金曜日の1日を使って、市内の学校に訪問をさせて頂いている授業がございます。2年生までフィールド研究で学校訪問をしておりますが、2年生になるとオブション実習ということで十勝管内を中心に、へき地校体験実習に1週間、釧路校では派遣しております。大体20名前後、ここ数年毎年派遣しております。募集をかけたときには、やっぱり倍率がありますので、今年度は約3倍の倍

率がございました。全員が行けるわけではないですけども、3年生に上がって主免の5週間実習を大体が小学校、或いは若干中学校でも実習を行っています。これが卒業免許状に必要な要件になっております。

3年生の主免が終わった直後の2週間で今度は、へき地校体験実習の、1週間ではなくて、2週間主免実習を終えて、今度はへき地小規模校の複式学級や或いは単式の少人数学級に配属になって、ここでは授業実習、教壇実習を中心に行っております。時期的に学芸会にぶつかっておりますので、学芸会の準備なんかも実習生も先生達と一緒に実習を行っています。

4年生になると副免実習で、中学校に実習に行っているのが大体2週間。或いは特別支援実習、特別支援免許を持つ学生達は2週間ないし、3週間、4年生の前期から後期にかけて実習を行っています。3年次でも実習に行っている学生もおりますが、4年次に、やっぱりもう1回へき地小規模校に行きたいということで、応募して下さる学生も今年度も若干名おりました。ですので、2年生、3年生、4年生の学年進行の中で観察実習が中心であったり、教壇実習が中心であったり。或いは中学校の実習も終えて、或いは特別支援実習も終えて、最後にへき地実習に行く学生も中にはおります。そういった感じで進行しております。以上です。

#### 報告 I 司会：戸田

よろしいでしょうか。ありがとうございます。

#### 鉄矢 悦朗（東京学芸大学）

東京学芸大学の鉄矢です。発表ありがとうございます。上幌内小学校と昆布森小学校と沼幌小学校の発表を聞かせて頂きました。他の方も聞きたかったのですが、無理でした。

それぞれの発表を聞きながら、頭がかなり回転しました。自分の考えをまとめるようなものではなく、考えさせられることを凄く示唆して頂いた気がします。その中で今でもまだ残って、悩んでいるのが、小規模校等を含めて、小学生からのキャリア教育をどういうふうにするべきなのかということです。たくさん世の中には色々な職業があるし、こんなに面白いよ、都市に行けばこんなにいいことがあるよって、伝えているような気がします。うちの大学は半分以上が地方から来ます。半分以上が地方から来て、そのうち地方に教員として戻れるっていうのは、少ないのです。上手くない状況が起こっていると思っています。一方で少子高齢化という中で、学校統廃合が進むという情報を聞くと、もやもやしてしまうというのが、今の感想です。結論は簡単に出ませんが。

#### 報告 I 司会：戸田

ありがとうございます。今日午後からの全体での研究協議の場面でも、今ご提議頂いた話題が出てくるかと思えます。では中妻先生よりよろしくお願い致します。

#### 中妻 雅彦（愛知教育大学）

愛知教育大学の中妻です。今日はありがとうございます。僕も3人の発表、朱鞠内小学校、昆布森小学校、沼幌小学校の2、3、4年生を、教師になるための教員養成教育のことを考えながら聞いていたんですけど、2年生、3年生、4年生の発表の内容が、実習の内容にもよるんでしょうけれども、凄く直感的でよかったです。2年生は直感的で感性的な捉えをして、具体的なことでも、子どもとの対話ということが出てくる。3年生になってくると、主免実習との比較があり、教材であるとか子どもとの学びということ等の振り返りが出来てくる。4年生になってくると、それをもっと概括的に全体を捉えながら報告している。そして、質問をしてみると、具体的なエピソードが出てくる。2、3、4年生と、実習を積み上げていくことでの成果は出ているんだろうなと思います。4年間の学部生活の中で、ずっと実習を位置付けていくわけですから、その実習を支える教科教育であるとか、特別支援も行っているようですので、大学での学習とへき地の教育の中身が繋がってきています。教育実習すると、事前事後指導だけで大学全体の、教科教育等々の繋がりが問題になるんだと思います。この繋がりをどのようにこれから作るのかが課題だろうと思います。2、3、4年生と、あきらかに成長してきている学生の姿というのには、参考になる部分がたくさんあると思いました。ありがとうございました。

#### 報告 I 司会：戸田

ありがとうございました。今ご提議頂きました、大学での学びとの接続の部分につきましても、午後からの研究協議の中で触れられることと思います。

では後、お一方程度になるかと思いますが、ご発言を頂ける方、いらっしゃいませんか。それでは若干時間が早いようでありますけど、ご講評を頂きたいと思えます。まず始めに、実習校の校長先生でもございます、鹿追町立上幌内小学校校長の原見先生、どうぞよろしくお願い致します。

#### 〔コメンテーター〕

原見 寿史 氏（鹿追町立上幌内小学校 校長）



〔原見 寿史 氏〕

十勝の西部に位置します、鹿追町の上幌内小学校から参りました、原見と申します。全校児童13名の小さな学校ですが、ちょっと私の学校のPRをさせて頂きますと、私の学校では羊を飼ってまして、今年未年ですが、2月8日つい最近ですが、2頭の子羊が誕生しまして、学校にとっては大きな大きな出来事として、この出産に関わる今回の喜びは、実は話せば長いストーリーがあるのですが、今日は省略させて頂きます。大変大きな喜びがありまして、私の学校に9月に実習に来て頂いた菅原亜希さんと志藤君、羊のもーちゃん、印象にあると思うんですが、無事にお母さんになりました。

それから私の学校は、色々な特色ある活動をしています、例えば、鹿追はそば処と言われてまして、そばが有名な所です。その地域のそばのノウハウを教えて頂いて、そばの栽培を行ったり、そして、それを使って収穫祭を行ったり。それから地域の自然を生かした環境教育も行っております。鹿追町は研究開発校ということで、文科の指定を頂いているのですが、その中の研究開発の教科の中に新地球学というものがありまして、地域の自然等を生かした環境教育も取り組んでいます。それから地域の先生も一杯いまして、そば打ちの先生、勿論地域に一杯います、学校に来てくれます。後は鹿追音頭の踊りを教えてくれる先生。それからキノコの植菌、木に打ち付けるわけですが、その先生も地域にいます。それから私の学校は、お母さん方達にお母さん方の得意なものというか、趣味を生かした自主サークルを是非やってもらいたいということで、お母さん方がそれぞれ自分達の思いで、読み聞かせサークルを作ってもらったり、物作りサークルを作ってもらったり、子ども達に生きる、そういったサークル活動を行って頂いているという学校であります。

さて、先程の学生さんのポスターセッションを見せて頂きました。本当にありがとうございました。私の学生の頃と比べますと今の学生さん、本当に堂々としていて意識が高いですし、非常に勉強されていて、レベルが高いなと感じました。9月1日から5日、私のところに来て頂いたお2人の発表を聞いていて、お2人のあの5日間の姿が本当に思い浮かびました。若さを子ども達に正面からぶつけて接する姿であったり、子どもの視線で向き合う姿と、2人のそういう姿を思い出しました。

さて、私の今日の役割はきっと、大学の先生方等たくさんいらっしゃる中で、現場を預かる者として、現場から見たへき地校小規模校の良さというところに、ちょっと焦点を当ててお話をしながら、これから教員を目指す学生さんに、教員としてこんなところに力を付けてもらいたい、ということも含めてお話をしたいと思っております。

へき地小規模校の良さを2つ挙げて下さいと言われたら、学生さん何を考えるでしょうか。どうでしょう菅原亜希さん。急な質問ですいませんね。何か1つパッと思い浮かぶものとしたら何でしょうか。

#### 菅原

子どもが少ないので、子どもの成長を間近で見ることが出来るので、子どもの能力に応じた教育が出来るのかなと思います。

#### 原見

なるほど、ありがとうございます。志藤君どうでしょうか。

#### 志藤

私はへき地ということで、自然が1番だと思います。自然に学ぶことが生きる力の形成にも繋がるとは思いますし、伸び伸び育ってくれると思います。

#### 原見

はい、ありがとうございます。急な質問ですいませんでした、本当に。

私なりに、へき地小規模校の良さを2つ絞って言って下さいと言われたら、私は1つ目は、やはりキーワードは地域ということだと思っています。先程、私の学校の特色ある活動をちょっと紹介させて頂きましたけれども、学校の多くの取り組みは、やはり地域のそういった素材、人材に支えられている、そういったものによって作られているというものがたくさんあります。先程紹介したのは、そのほんの一部なんですけど、そしてそうした地域の教材、人材によって作られる学習の良さは、子どもにとって何があるかということ、やはり1つは、そういう学習のときの子どもの表情っていうのは、もうまさに目を輝かせて、本当に楽しそうに学ぶ姿をいつも見せてくれるわけですが、やっぱり子どもにとっては、本物を学べるということが1つ大きなことがあろうかと思っています。

それから、地域の人達が学校に来て自分達に、地域の先生役として教えてくれることに対して、子ども達がやはり、毎回毎回感謝の気持ちをもってお迎えをして、その気持ちに応えるように一生懸命勉強しているという、地域の人達への感謝の気持ちが育つものになっているでしょうし、そのことが更には、自分達の地域って凄いなよな、自分の地域本当に好きだよなっていう、そういう地域を誇りに思うとか、地域を愛する気持ちに繋がる。先程、キャリア教育というお話も出ましたが、私の学校でいうと、そういう地域のことを知って、地域の素晴らしさに子ども達が気付いて、そして地域を誇りに思えるということが、1つの小学生の大きなキャリア教育にもなっているのかなと思っています。

もう1つ、へき地小規模校の良さを絞るとすれば、私は学習面だと思っています。十勝で言いますと、小規模校の学力は中規模、大規模校と比べると、やはり高い傾向にあると思います。菅原さん、何故小規模校は高い学力の傾向が出ると思いますか。

## 菅原

小規模校だとやはり、つまずきにすぐ教師が気付くことが出来ると思うので、つまずきをすぐ気付かせることで、つまずきを放置しないで学習を進めることが出来るのかなと思います。

## 原見

はい、ありがとうございます。志藤君はどうでしょうか。

## 志藤

私は、へき地は他の都市部と比べて、学力が低いものだというふうに思っていたので、学力高いと言われて、ちょっと今考えが思い浮かばないです。

## 原見

はい。十勝の実態ということで、高い傾向にあるというお話しましたがけれども、今回十勝で昨年度、今年度、全道へき地の研究大会でやりまして、その成果を整理する中で大会を通して、学力体力どうなったんだろうということも、こちらの方である程度集約した部分ですが、確かな成果が出て来てるのがあるかと思っています。

それで、もう少し突っ込んだ話をしますと、私の学校もそうですけども、小規模校の多くの学校では、子ども1人1人の個人カルテを作っているという、そういった取り組みもあろうかと思っています。その子1人1人の学力の状況についてだったり、その習熟度。どういうところで力を発揮しているのか、どういうところでつまずきがあるのか。また、学習面での興味関心であるとか。または、学習面に向かう態度姿勢であるとか。または、生活習慣等も含めて、子ども達の実態をカルテ化して、詳細に把握するという事です。それが授業の中で、まさに個々に応じた、1人1人に応じた指導に繋がっているでしょうし、または、小規模校だけでなく、今色々な学校で行われておりますけれども、授業時間以外で補習の時間等がある中では、私の学校でも全職員が全児童に学習サポートするという事では、やっぱり職員全員が子ども1人1人の実態を詳細に共有した中で指導に当たるといことも出来る環境にあるのかなと思っています。勿論、小さな学校ではなく、学年別指導ということで今、国語から理科、社会、勿論算数は長い歴史がありますが、4教科学年別指導ということで、十勝も取り組んでいるわけですが、その学年別指導、わたり、ずらしという授業の姿が授業の中には子どもが自分で学ぶとか、自分達で学ぶという、そういったものが根底にあるわけですが、そのことがやはり子ども1人1人の学力にもきつと繋がっているのかなということが、今回の全道大会に向けた会場校の成果を見ても感じているところです。

ここでちょっと1つ、調査のデータを紹介したいのですが、私の学校の研究部の主任が、私の学校の研究に活用出来る資料を収集するために、十勝管内の小規模校を対象にアンケートを行いました。何かというと、小規模校におけ

る先生と児童の現状について。特に、先生方のやり易さとやり難さという、そういった中身でアンケートをとったんですが、どういうものかと言いますと、小学校はたくさんの教科がありますが、その教科の中で指導する先生方が、やり易さを感じている教科、やり難さを感じる教科。色々面白いデータが出まして、やり難さということ言いますと、社会、理科は十勝管内の傾向ということでしょうけれども、やり難さを感じる先生方が6割、7割近くあるということです。算数は3割程度ですから、やはり算数の指導については、十勝の中でもしっかりと定着されてきている。社会、理科はまだ歴史が浅いというのがありますが、学年別については、そういったやり難さがあると。それから芸能の教科についても、1つだけやり難さを感じているのが体育という結果が出まして、小規模校の体育は、その種目によっては球技であったりというのは、集団スポーツについては、やっぱり大きなやり難さを感じているという、そういった結果も出ているということです。また、教科ということではなく、子どもの生活経験という点では、やり難さを感じている。それから思考力、コミュニケーション能力ということで、やり難さがあるという結果も出ています。逆にやり易さでは、学習意欲、地域連携、家庭協力。それから教職員の交流という部分でも、小さな学校のやり易さという、そういったデータも出ているということです。学習指導の中でもやっぱり子ども達の思考力、コミュニケーション能力等は、1つの改善しなきゃならん部分かと思っています。すいません、長くなってしまいました。最後3つだけ話させて下さい。

そこで学生さんに期待するという事で、3つ端的に話をします。何と言いましても1つ目は、確かな授業力を身に付けて頂きたいということに尽きると思います。わたり、ずらし、やはりそう簡単なものではないと思います。大変な指導法を先生方自身がマスターしなければならないということです。そのわたり、ずらしの大変な授業作りにはなりますけども、そこにはやはり、少人数複式形態の良さを最大に生かすことが出来るという可能性もあるわけですから、授業作りという点で確かな力を付けてもらいたいということが1点です。

2つ目ですが、学校は多くの取り組みが地域によって、地域の人材、素材と、支えられている話をしましたが、その時にやはり、地域の素材を教材化する、カリキュラム化するためのクリエイターとしての力、それからコーディネーターとしての力をやはり我々、持つ必要があるかなというように思っています。きっと私にも気付かない地域の良さって、たくさんまだまだ埋もれていると思うのですが、それを教材化するときに、それを企画する力、そして1つの授業として作り上げるときに、地域の人材を生かす中で、先生方がやはりコーディネートするという力。今はもう、先生方だけで授業をやるという時代ではありませんから、地域の力も借りて、人材も借りて、それをコーディネートする、そして授業を作っていくということが、やはり求め

られているんじゃないかと思っています。

3つ目最後ですが、小さな地域は地域の行事が多いですし、地域との触れ合いの機会も大変多いですが、これを大変さと感じるか、それをプラスと感じるかということは、あるかと思います。現実的には大変な部分もあるのですが、私はやはり思い切って地域に飛び込んでもらって、地域を知って、地域から学んで頂いて、そして学校として地域を生かしていく、そういったことが大切かと思っています。すみません、私10分ぐらいで納めようと思っていたのが、時間をオーバーしてしまいました。申し訳ございませんでした。以上で終わらせてもらいます。

#### 報告 I 司会：戸田

原見先生、ありがとうございます。続きまして、北海道立教育研究所企画・研修部長の鈴木様、よろしくお願ひ致します。

#### 【コメンテーター】

鈴木 淳 氏(北海道立教育研究所 企画・研修部 部長)



【鈴木 淳 氏】

道立教育研究所の鈴木でございます。どうぞよろしくお願い致します。今日の会場には半分以上学生さんで、更に教員を目指そうという学生さんなので、その皆さん方に向けてちょっとエールを送りたいと思います。

実は北海道立教育研究所は、北海道の先生方の教員研修を提供する所管部署であります。いわゆる「道研」と呼ばれており、江別市にありまして、そこに来て研修をしてもらったり、またはこちらから出掛けて、出前講座ということで研修講座を提供する仕事をしています。今日発表して頂いた学生さんは、北海道教育大学だけではなく、本州の学生さんもいますので、是非、北海道の広域的なところで、こういう教育環境の中でそれぞれ先生方が頑張っている、そういうことも含めて、ちょっとお話をしたいと思います。

まず、今日発表して頂いた学生の皆さん方、素敵な表情で凄く格好良かったです。本当に実習を通して実際に子ども達、または先生方と関わっていく中で、色んな価値のある実体験をしてきたんだなっていうことを学生さんの発表の姿を見て感じました。本当に実習というのは、実体験を通して教育的価値を学生さんがそれぞれ得ているんだなと

いうことを感じました。それは多分、実習をした学生さんの教育的価値はそれぞれ違うと思うんですけども、これからの教員になるための、1つ1つの資質に結びついたり、土台になっていくのかなと思いますので、是非得たものを大事にして頂ければと思います。

今日の発表の中で、大体学生さんは最初に地理的な内容だったりとか、それから学校規模のお話がまず冒頭にありました。私も先生方の前でよく地域を知ることの大事さについて言っています。「地域を知る」というのは、結局子ども達はその地域でずっと育っています。そういう環境の中で育った子ども達が学校に来ているわけですから、当然子ども達の生活環境や、家庭環境も含めて知るということは、教育的効果を得るため、非常に大事だということになると思います。そういう点では学生さん、今日の発表の中で、色々実習した学校の様子だとか、地域のことを話をしていたということで、素晴らしかったなと思います。もう1つ欲を言えば、そういう環境で育った子ども達の様子、表情であるとか、性格であるとか、子ども達の状況をもっと話をしながら、それが自分が実習を通して、こういうふうに子ども達が変わっていったことを発表されればこの実習が、教育的価値が高まるのかなと思ったところです。

それから先程、中妻先生の話にもありましたけども、今日は最初に2年生が発表して、続いて3年生、そして最後は4年生が発表しました。そうすると私も、それぞれの学年段階で学生さんがどういうふうに違うのかなっていうことで、話を聞かせていただきました。私なりの感じたことは、学年が上がると、子ども達との距離間が近づいてきているなっていう感じがしました。最初、2年生は初めての实習ということで、大きなフレームでお話をしたりする方が多かったのですが、学年が上がると指導技術が少しずつ身に付いてきており、子ども達の変容などについての話になっていき、これはきっと、キャリア形成に繋がっていくのかなというふうに思います。今教員も初任者1年目の先生、5年目の先生、10年目の先生対象の研修があります。その研修の中で、自分がどういうふうにキャリア形成をしていって、より教師らしくやっていくかっていうことをそれぞれ研修を通して学んでいます。これから学生さんもきっとそういう点では、今2年生の実習をして、そして3年生、4年生となって、教員となってから自分の振り返りが、非常に大事になってくるのかなっていうことを今日のポスターセッションを通して感じたところです。これは、釧路校の工藤さんが、これまでの実習のことを振り返っていましたが、きっとそれが自己評価いわゆるリフレクションをしていく、振り返っていくっていうことが、自分のどういう教師像、どういう教師になりたいかっていうのに繋がるかなと思いますので、是非そんなことも振り返って頂ければというふうに思います。

先程、校長先生からもお話ありました、へき地小規模校の良さっていう話もありましたけども、小規模校、それからへき地、良さは一杯あります。それが裏返しをすると、

例えば大都市であるとか、大規模校で出来るか出来ないかという視点で考えてみるなど、つまり良さの裏返しが何なのかということを検証していくということも大事なかなと思います。きっと小規模校で出来ることは、大規模校で出来ることもありますし、でも、やっぱり小規模校だけしか出来ないっていうのもありますし、それを良さっていうふうに括っちゃうと、小規模校も大規模校も全部1つの良さって括るのかなって感じもします。皆さん方はきっとこれから教員になった時に、色々な学校規模に勤務すると思いますので、そういうことをこの実習を通して、検証していくってことも、1つ必要なかなと考えます。これは是非皆さん方に宿題として、長い教員生活の中で考えていただきたいなと思います。

それで最後に、実は先程、鉄矢先生の方からキャリア教育の話がありましたけども、私も良く先生方の前でお話をする1つが、例えば、小学校は1年生から6年生まで、6歳から12歳の子ども達が目の前にいます。この子ども達が例えば、15歳になった時の姿をイメージして、じゃあそのために、今、目の前の小学校1年生の子ども達に何を身に付けてもらえればいいのかっていうことが考えられるかどうか。やはり子ども一人ひとりの将来像、目の前の子どもの姿っていうのをイメージしながら、具体的にどういう教育をしていくのかって、それが非常に大事だっていうことをお伝えしたいなと思います。それがまさに学び方を身に付けていくっていう、キャリア教育の1つになるのかなっていう、そういう感じがします。今国をあげて小中連携一貫教育が進められ、6・3制度が変わりつつあります。そういう中でへき地小規模校の子ども達、当然小学校の子ども達がそのまま中学校へ行くっていう、まさに9ヵ年でどういうふうに育てるのかっていうことになりますので、キャリア教育という視点を例えば、学習指導の視点で、または生徒指導の視点で、というようなことを位置付けるのも大事なかなっていうことを感じたところです。是非これから様々な子ども達、様々な教育環境の中で学生さん、または教員になってからも色々ありますので、是非今日の発表や実習で体験したことを通して得たものを次に繋げて頂けるよう、ご期待申し上げて、お話させていただきました。今日は本当に私もたくさん学びました。そして、素敵な表情を見せてもらいました。その素敵な表情はずっと忘れないで、頑張ってくださいと思います。今日はどうもありがとうございました。

#### 報告Ⅰ 司会：戸田

短い時間ではございましたけれども、この全体協議でご意見ご感想、そしてご講評頂きありがとうございました。皆様のご発言をまとめる力量は、私にはございませんけれども、本日頂きました、ご意見やご講評を大学の方に持ち帰りまして、今後のへき地校体験実習の充実に努めて参りたいと思います。

では改めまして、この度ご講評を頂きましたお2人の先

生に、拍手でお礼とさせていただきますと思います。原見寿史先生、鈴木淳先生、どうもありがとうございました。

発表を頂きました11名の学生の皆さんも大変ありがとうございました。お疲れ様でした。以上を持ちまして、学生による報告Ⅰを終了させていただきます。

#### 報告Ⅱ 司会：西村

それでは定刻より少し遅れましたが、ただ今より、学生による報告Ⅱを始めさせていただきます。司会を務めさせていただきます、へき地部支援部門の西村でございます。どうぞよろしくお願い致します。

報告Ⅱの流れについて、ご説明させていただきます。大阪教育大学、東京学芸大学、愛知教育大学の順にご報告を頂きます。時間の方ですが、それぞれの発表10分、そして大学の発表が終わった毎に、質疑の場を設定したいなと思います。14時20分を目処に終了させて頂き、講評を頂く流れとなっております。それでは早速報告に移らせていただきます。大阪教育大学、どうぞよろしくお願い致します。

#### 大阪教育大学

##### 〔報告者〕

馬場 京子（教育科学専攻）2回生

大島 健人（国語教育専攻）2回生

藤本 凌平（特別支援教育専攻）2回生

実習校：愛知県西尾市立佐久島小学校



〔大阪教育大学②〕

大阪教育大学です。よろしくお願ひします。まず始めに、大阪教育大学の遠隔地実習の位置付けと言いますか、システムについて話させていただきます。朝、お配り頂いたパンフレット見て頂くと分かりやすいです。大阪教育大学では1回生と3回生に必修の実習としまして、観察実習と基本実習が設けられています。それに加え選択となりますが、2回生と4回生に学校教育の体験実習と、4回生での主免実習の更なる発展を目的とした、発展実習が用意されています。僕達が今回参加した遠隔地実習、へき地実習は、この2回生の学校体験実習のオプション実習として用意されたものです。この遠隔地実習には3校に行っておりまして、1つがここにも出ている愛知県の佐久島小学校と長野県の白馬南小学校と、人権教育に力を入れている三重

県の川口小学校の3校です。順番が前後しますが、まず愛知県の佐久島小学校について紹介させて頂きたいと思います。

佐久島小学校とは愛知県の三河湾の中央に位置する島で、島民が250人ととても人口が少ない島となっております。限界集落となっております。また島は、自転車で大体30分程で1周出来るほどの大きさで、小さい島です。今はアートの島として観光に力を入れておりまして、コナンの天空のロストシップという映画にも登場し、非常に観光客が毎日多く訪れる島となっております。

佐久島小学校には2年生から6年生までの計13人がいます。2年生と4年生は単学級ですが、5・6年生は1つの教室で学習をしていました。島から通っている子どもが9人、島以外のところから通っている、しおかぜと呼ばれる子ども達が4人います。しおかぜというのは、島の外に住む児童が特別に佐久島小に通える制度となっております。島の子ども数の減少による廃校を防ぐために、平成15年度から導入された制度で、小学3年生以上になると、しおかぜを利用することが出来ます。自然環境に恵まれた小規模校での心身の健康増進、体力づくり、豊かな人間性の育成といった保護者の希望があれば、しおかぜで佐久島小学校に通うことが出来ます。大規模な小学校で個人を発揮出来なかった子ども達が、佐久島小学校に来ることで個を発揮し、生き生きと学ぶことが出来ています。

続いて、実習の大体の流れを説明したいと思います。これは後でムービーでも流すので軽く説明していきます。さっきも言いましたが、しおかぜ制度の導入ということで、しまっこ達はその島から普通に来るのですが、4人、この子ども達は毎朝船に乗ってきます。それで起床時間等も早くなっています。8時に船の子達は集団登校、しまっこ達はしまっこ達で集団登校という形になります。佐久っ子タイムというのが、20分設けられています。全校生徒13人ということで、どうしても人数が少ないので、小学校全員で遊ぶという時間になっています。その後、普通に時間が進んでいって、子どもが下校時刻になると船で帰るので、船の時間まで全員で放課後遊ぶってことになっています。五時半頃に帰宅。先生達も船で来ていらっしゃるので、最終便が6時頃になると思います。その頃にはそれに乗って帰るので、7時頃には学校には住み込みの人しかいないという状態になります。

しまっこ達は、そこから再度学校での活動が始まります。例えば佐久島太鼓というものがありまして、これを地域の人達と一緒に練習したり、スポーツ教室で遊んだりしています。スポーツ教室は、木曜日に小学校を解放して、夜間ですが照明があるのでそれを点けて、住み込みの先生の管理の下、みんなでスポーツや遊びの活動していました。ここで1回ムービーを挿みたいと思うので、ムービーをご覧下さい。

ムービーはこれで以上になります。最後に2つ、ムービーを踏まえた上で聞いてもらいたいことがあります。佐久島小学校が、中学校も一緒なのですが、テーマとしてい

ることが2つあります。

1つ目が「1人1人が主役」ということです。見てもらった通り分かると思うのですが、13人という少ない人数の仲間で、小中学生を合わせても20人程度になります。3人ずつのグループになって、1人1人が何をすべきかを考えて活動します。小学校は2年生、4年生、5・6年生しかなくて、間の学級がありません。けれども、「成長すれば僕達が今度は下の子達を引っ張っていかないといけない」という自覚があって、こちらへんもやはり特徴的なのかなと思いました。また、しおかぜ制度の導入によって、しまっことしおかぜ達との関係なのですが、しまっこ達は、自分達の島に来てくれた子ども達に対して、島の案内をするなど、どんどん自分の島を好きになってもらおうという強い気持ちを感じられました。また、しおかぜ制度で来ている子どもの中には、市内の大きい学校では不登校気味の子達もいて、佐久島に来たことによって学校にしっかり来られるようになったという話も聞きました。また、大勢の中で埋もれてしまっていたのですが、佐久島に来ることによって個性を発揮出来て、本当に佐久島の様子だけで見たら、そんな過去があったんだなってこと全然気づかないような子ども達もたくさんいました。

2つ目のキーワードが、これは学校だけじゃないのですが、島全体で「笑顔咲く島」っていうのを取り入れています。これは例えば、運動会の名前が「地域ふれあい大運動会」という名前であって、小学校、中学校、幼稚園、それと島民が参加型になっています。それを見た時に、250人の少ない島だからこそ、そういうことが出来るのではないかということを感じました。さっきのムービーで見ても良かったと思いますが、僕達がカメラを向けると子ども達は本当に色々な表情をしてくれて、その笑顔咲く島っていうのが、ここで体験出来たんじゃないかなと思います。すいません、色々と不手際があって時間がなくなっちゃいました。これで佐久島の発表を終わります。続いて、川口の発表に移らせて頂きます。

#### 〔報告者〕

西尾 俊祐（国語教育専攻）2回生  
 糺 佳苗（教育科学専攻）2回生  
 実習校：三重県津市立川口小学校



〔大阪教育大学①〕

大阪教育大学の西尾です。よろしくお願ひします。色々不手際がありまして、緊張しているのですけれども、昼食後ということもありまして眠いかもしれませんが、どうか動画を見て下さい。では始めたいと思います。

この動画に使わせて頂いている曲なんですけれども、僕らが企画した授業の中で歌詞を使うシーンがありまして、使わせて頂きました。

これが1日の大まかな流れです。時間が昼、放課後、夜、深夜というふうに、大まかにしか区切れていません。

これが調理風景です。市民会館の近くに住む子ども達も料理を手伝ってくれました。食事を全員でとることが出来て、情報を共有しつつ、和む、息を抜く時間がありました。

こちらが授業風景になります。川口小学校は、1学年1クラスの小規模校となっています。

実習生企画の放課後学習会を行いました。3回も行わせて頂いたのですが、色々試行錯誤の連続でした。

私達の行っている大学での勉強に興味を持ってもらおうということで、それぞれの専攻に分かれて話をしたり、実験を行ったりしました。

こちらが休日に僕達が企画させて頂いた、ドッチボール大会です。全学年が仲のいい川口の子どもの達の特性を生かそうと思ひまして、全学年で遊べるものを企画しました。私達のこと知ってもらおうと思ひまして、〇×クイズ企画等も盛り込みました。

こちらは、地域のスポーツ少年団のソフトボールのチームの応援に行かせてもらったときの映像です。川口小には学校公認のソフトボールチームがありまして、大会で優勝するほどの実力を持っています。この日は校長先生を始めとする、ソフトボール応援団として応援に参加させて頂きました。学校と違った子ども達の一面が見れて、実習として参加することに意義がありました。

北海道では教壇実習と言ひましたが、こちらが僕達の授業風景です。この授業では1人1人にしか語れない自分のこだわりというものを語らせて頂きました。

これで動画を終わらせて頂きます。続きまして、パワーポイントの方で発表させて頂きます。

津市立川口小学校なんですけれども、人権教育の推進校です。教育活動の課題を人権学習におひていまして、1人の児童を中心にクラス作りがされています。こちらは前にも書いているのですが、「視野から漏れる子ども」というのが合言葉になってまして、そこを中心にクラスづくりをしています。いわゆる問題児とは違って、そこから漏れてしまう子どもに焦点を当てましようということです。毎年夏にも研究発表会が行われています。めざす子ども像は、「自ら学び考える子、仲間と共に高まろうとする子、明日を描こうとするたくましい子」となっていました。

こちらは川口小学校の合言葉になっています。「WE LOVE 川口。自分が好き、人が好き、川口が好き」というふうになっています。自分が好きなことから始まり、「周りの人が好き、そして地域も好きになろう、明日に向かう子どもを

育成しよう」ということを合言葉にしています。教育方針としましては合言葉に従ひまして、低学年はセルフエスティーム、自尊心を高める、そして中学年はセルフエフィカシー、自己効力感を高める、高学年はレジリエンス、逆境をバネにする力を育てよう、というふうになっています。

授業風景、先程の動画がでもあったのですが、これは4年生の授業風景を表わしています。1学年の人数は9人から20人ほどの単式学級で、小規模校として考えることが出来ると思ひます。1人1人の学習進度を教師が詳しくしっかり把握していることで、教育が深く出来るのではないのでしょうか。

大阪教育大学の糺佳苗です。よろしくお願ひします。休日にも学生主体で様々な活動をさせて頂きました。こちらの写真はドッチボール大会なのですが、学生主体となって、ドッチボール大会を休日に開催させて頂きました。全学年の児童が参加するというので、1年生から6年生までが皆楽しんで出来るように、ルールや待ち時間の工夫等、何度もミーティングを重ねながら行ひました。大会終了後には先生方からもアドバイスを頂ひて、その日の夜には皆でミーティングを開いて、良かった点や反省点等を話し合ひました。

こちらが先程動画でもあったように、ソフトボール大会の様子です。ソフトボール大会では、このチームの監督やコーチは川口小の保護者の方が行ひています。学校関係だけでなく、こういうスポーツ等を通して地域と学校が交流することで、より深く保護者の方と学校側が関われるというふうに、校長先生はおっしゃっていました。

こちらは私達が放課後、3回行わせて頂いた学習会の様子です。1回目は何も分からない状態で、2時間学習会を学生だけでやってみました。凄い勉強する児童もいれば、遊んでしまう児童もいて、めちゃくちゃな2時間になってしまい、反省点が凄く多かったです。先生方からのアドバイスを頂ひて、その日の夜に皆でミーティングを開き、2回目は学生と児童が仲良くなるとういうことで、勉強が終わった後には、子ども達とスタンプラリーをして遊ぶことで、子ども達の交流を深めました。3回目には子ども達との距離感も縮まったので、私達大学生をもっと身近に感じてもらうとういうことで、自分達が専攻している学問についての学習を考えてみました。私は心理学コースなのですが、目の錯覚を利用した遊びを体験してもらおうと思ひて、休憩時間も工夫しました。今まで川口小学校は休み時間に4年生から6年生がサッカーをするなど、異年齢交流というのが盛んだったんですけど、この学習会により、教科活動による異年齢交流も出来たかなと思ひます。

こちらは企画授業の様子です。私達は学校側から事前に、「自分にしか語ることを出来ない授業を1時間お願ひします」と言われていました。実習に入る前からどういう授業をするかということを考えて実習に臨んだのですが、そこに実際に個人の問題を抱えたり、クラスで問題を抱えたりしながら生活する子ども達の様子を見て、授業プランが変



わかりました。クラス全体じゃなくてその子に伝えたいという、1人の児童に対して、企画授業を行おうというふうに授業計画を大きく変えて、実習に入ってから作るようになりました。事前に考えてきた授業計画とは大幅に変更しましたが、子ども達に直接伝えたいことを伝えることが出来たかなと思います。

まとめなのですが、2週間という短い間でしたが、私はこの実習でクラスの見方が大きく変わったと思います。今までは小規模人数であっても漠然とクラスを見てしまっていたのですが、1人の気になる児童に視点をあてることで、その児童を中心にクラスを見ることで、その友達関係や関わり等がより深く見れたかなと思います。この川口小学校は同和地区に当たるのですが、場所的にもへき地であると思います。川口小では同和問題について、放課後学習もたくさん取り入れて、中から見た同和地区は、差別に負けるなというレジリエンスの構築等、たくさんの取り組みが出来ていると思います。しかし、外では「寝た子を起すな論」とか言って、同和問題についてちょっと冷めた見方も持っている人達が多いように思います。川口から外に出たとき、子ども達がどういうふうになっていくのかが、今後の課題なのかなというふうにも思いました。

僕からも今回の実習を終えての感想を話します。2回生でこの実習を行うことについてですが、教師というものを知ることが出来ました。2週間という長い間、1人の担当教員について頂いて過ごすことが出来、実際に教師をやる上で何を心構えとするのか学ぶことが出来ました。一緒に行った5人の仲間達と話し合うことが出来て、とてもいい経験になりました。様々な視点が得られたと思います。それから、へき地小規模校での安定した人間関係というのが子ども達に見られました。分からないことが分からないと言える環境がそこにはあったと思います。こうしたことから生きる力、学ぶ力が育つのではないのでしょうか。私達の発表をこれで終わらせたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

#### 報告Ⅱ 司会：西村

ありがとうございました。ここで質問等の時間を取りたいと思います。尚、大阪大学の資料の方、机の上に上がっていたかと思いますが、こちらの方も参考にして頂ければと思います。

それでは、ご質問等に移したいと思います。発表等を聞きまして、確認したい点とかありましたら、お願いします。

#### 佐野（北海道教育大学 釧路校学生）

発表どうもありがとうございました。北海道教育大学釧路校の佐野と申します。川口小学校の方で少し聞きたいことがあるんですが、特色として、人権教育推進校ということでご紹介されたと思うんですけど、レジユメの活動内容の中で、人権ネット啓発映画会ですとか、そういった人権教育の懇談会等に参加した旨が書かれているんですが、具

体的にどういった内容の講演があったのかということと、あと、実際に小学校での人権教育の実際というか、そういったものを教えて頂けると有り難いです。

#### 西尾

人権教育の講演だったり、映画会だったんですけども、実際に外部の講師の方を呼んで、人権教育についての講演を行って頂いていました。あと、映画会についてなんですけど、地域に残る、地域に帰ってくることについての怖さだったりとかを映画を通してですが、見る事が出来ました。同和地区に住むということはどういうことなのか、ということも少しは知ることが出来たかなと思います。それで小学校における授業の活動なんですけど、つい先日友達集会というものがありまして、1年生、2年生、低学年に関しては先程も言ったんですが、セルフエスティーム、自尊感情を高めるということで、自分の友達、家族から大好きだよと言われること、抱っこされるのが嬉しいということを感じることを発表してみました。3年生、4年生はセルフエフィカシー、自己効力感を高めるという目標の基、自分がどのような役割を持っているのか、集団の中で役割を持っているのかということ意識して、発表させることが出来ていました。5年生、6年生はレジリエンス、逆境をバネにする力なんですけれども、6年生に至っては、仲間とギョッと繋がるということがテーマになっていて、中学校になることを見据えていて、中学校へ進むと、2小1中になって、川口小学校よりも規模が大きい小学校と中学校では合同になります。そこで6年生は9人なんですけど、仲間と繋がることで環境の変化を乗り越えることをまず第1のステップとして、大人になるにつれて、どんどん逆境が出てくることを想定させている教育が行われていました。心を育てることが6年生にもなると出来ていたかなと思います。



〔大阪教育大学③〕

#### 佐野

ありがとうございました。

#### 報告Ⅱ 司会：西村

その他ご質問等、いかがでしょうか。

## 廣田 健（へき地教育研究支援部門 釧路校センター員）

釧路校の廣田健と言います。全員に質問ということになるのかな。この実習は選択実習でしょ。それできっと何かを希望して、或いは見たいなとかを思って行ったと思うんですね。それがどういうものだったのかということと、行って来てそれに対して、どういうふうに思えたのかっていうことをちょっと一言ずつでいいので、教えて頂けたら嬉しいなと思います。

## 糺

大阪教育大学の糺です。私は小学校、中学校と、千人近い大規模校で育ってきました。なので小規模という学校は、どういうふうな活動をしているのか全く知らない状況だったので、そういう自分の育ってきた学校とは違った環境における子ども達の様子を見たいなと思い、この遠隔地実習に参加を希望しました。実際行ってみると、やっぱり大規模校では、問題行動を起こす子ども達に目が行きがちで、1人1人をしっかり見るということは難しい部分が現実としてありますが、この川口とかといった小規模の学校では、1人1人先生達が把握して、この川口ではほとんど毎日児童の家庭訪問等を行って、児童について1人1人と深く関わっているなという実感を受けました。

## 西尾

同じく西尾です。僕は遠隔地実習を申し込んだ際に、川口小学校を希望しました。人権教育について1回生の時に、部落問題概論という授業で習いまして、そこに興味が生まれました。実際に向かってみて、川口に行ってみて感じたことなんですが、都会の大規模校よりも心が育っているなというふうに感じました。小規模校なので様々な意見が出ないとかいう、授業上のデメリットは感じられると思いますが、安定した人間関係があることによって、先程も言ったんですが、自分のことがさらけ出せるというか、ありのままの自分でいられるのではないのでしょうか。自分にも足りなかったものが見付かったかなと思いました。

## 大島

同じく、佐久島の大島です。僕も似たような意見なんですけど、小学校、中学校、高校と大規模の数のところにおいて、僕は佐久島を希望したんですが、全校生徒13人と聞いて、その数の少なさっていうところに逆に魅力を覚えて、そして島の学校ということで、島の学校ってどういうものなのかって、今回の体験実習でしか、そんなへき地は体験する機会はないと思って、志望しました。そこで見たものなんですけど、島の子ども達ってどんなだろうって思っていたんですが、島だからといって、例えば教育が遅れているなどと全く感じず、むしろ、さっきも言ってくれましたが、生きる力っていうのはやはり、都会の子ども達よりも感じているんじゃないかなと思っていました。しまっこ達とかだったら特にその島に、自分達が、将来どうするのって聞いた

ら、お父さんみたいに漁師になりたいとか、夢とかをしっかりと明確に持っている子ども達が多いなと感じました。

## 藤本

僕も小中高と大人数の学校に通い、島の学校というものに対しては、ニュースでの情報しかなかったので、どういふところであるか、または、そういうところでは、どのような問題を具体的に抱えているのかと、また、少人数での利点を間近で見てみたいと思い、佐久島を希望しました。佐久島で学んだことは、とにかく人数が少ないので、通常の学級でも、子どもの実態に合わせて授業を作ると思うんですけど、更に子どもの実態により合わせた授業が組めるっていうことを見て、それを授業をさせて頂くときに、やはりしなければ子ども達に伝わらないので、求められたのですが、その子ども達に合わせた授業の重要性と組み立てることの難しさ、また自身のそれを実現するための力のなさを学びました。

## 馬場

佐久島小学校の馬場です。私も大規模の小中高で過ごしてきて、先生に見てもらえないっていう学校生活を送り続けてきていました。それで小規模校を聞いたときに、この子達だったらきっと、先生にいつも見てもらえているんだろうなと思い、そういう状況を見てみたいなと思ったので、佐久島を希望しました。実際に行ってみると、先生と子どもとの距離が凄く絶妙なバランスがあって、時には兄弟のように、親のように、または、先生のようにと使い分けられていて、凄く羨ましいなと感じることが出来、私も子ども達とそのような関係を築けるような教員になりたいなと思いました。

## 報告Ⅱ 司会：西村

ありがとうございました。本当はまだまだご質問等あると思うんですが、ここで1回区切りまして、次の東京学芸大学の方に移りたいと思います。大阪教育大学の皆さん、どうもありがとうございました。

準備の方が整いました。それでは東京学芸大学の発表です。よろしくお祈いします。

## 東京学芸大学

〔報告者〕小林 拓哉（初等国語専攻）4 回生

実習校：東京都墨田区立桜堤小学校



【東京学芸大学①】

では発表を始めさせて頂きたいと思います。学芸大学からは2人発表しますが、どちらもそれぞれ異なった観点での発表になりますので、どちらも是非最後までお聞き下さい。僕のタイトルなんですけど、こちらにある通り、一般的な教育実習、学芸大の一般的な教育実習というものを僕は他の場所でのボランティア経験があるので、そのボランティア経験を通して振り返ってみようかなということで、発表していきたいと思います。大きく3つのタイトルでこれから発表を進めていきます。

まず最初に、東京学芸大学の一般的な教育実習について、簡単に最初にご紹介を致します。他の学校だと多分、主免実習って呼んでいたと思うんですけど、うちは基礎実習の3週間と応用実習の3週間の2つ合わせて、必修の免許を取るに必要な実習というふうに位置付けています。ここに書いてある通り、学部3年の時に附属の小学校ないし中高、特別支援等で基礎実習という形で実習をして、学部4年になってから今度は、東京都内で協力して下さる公立の小学校に、僕の場合は小学校なんですけど、実習に行きます。中高の場合は母校実習に行きます。色々な人によるんですけど、免許を他に取る人っていうのが、選択実習っていう形で、もう1つ実習をします。僕の場合は附属の協力校の小学校、最後は中高の国語の免許を取るために、附属の高校で2週間だけ実習をしました。主な実習の内容なんですけど、たくさん話したいことはあるんですけど、時間の都合上大きく分けていくと、基礎実習と呼ばれる最初の3週間に関しては、教科、授業をちゃんといかに、自分が今まで大学で学んできたことを生かして実践できるかっていうことを中心にやっていきます。応用実習に関しても同じで授業はするんですけど、どちらかというと公立の学校の先生方は、もっともっと机で勉強していないで、子どもともっと向き合いなさいよっていう先生方が多くて、別に統一的に生徒指導を中心にしていないわけではなくて、そういうふうな実習を結果的に過ごす学生が多いっていうふうになっています。選択実習では改めて、僕は高校だったので、古文をやるという感じで進めていきました。

では次に、墨田区立桜堤中学校STボランティアって長いタイトルなんですけど、これについて説明をしていきます。これなんですけど、今回へき地小規模校プロジェクトでこちらに発表に来ているんですけど、僕は他の先導的プログラムの中の教育環境支援プロジェクトっていうプロジェクトの中で、ターゲットになったこの桜堤中学校ってところに、ボランティアという形で実習に行っているっていう、一応背景をご説明してから説明に移ります。僕全部でもうかれこれその中学校に2年間、学部3年から今に至るまで2年近く関わっているんですけど、その中で大きく分けてここで3つの観点からお話したいんですけど、基本的に教育実習と違って、先生という形で行くのではなくて、その現場に起こっている問題を学生として色々大学で学んだりしたことを生かして、問題を解決していこうみたいな感じで、漠然としたタイトルで学校に行ったので、僕達もよく分かんないし、先生達もよく分かんないっていう中で、お互いにお互いを模索し合いながら、ある意味自由な関わりをすることが出来ました。具体的にどういう活動をしていたかというところ、例えば悩んでいる中学生がいて、子どもと僕の写真正がないんですけど、その会話をしていたときのホワイトボードが残っていたので写真を撮ったんです。何か凄く悩んでいる、中学2年生の女の子だったんですけど、最近人との接し方が分かんないっていう悩みを先生が先生という立場で受けちゃうと、子どもが萎縮しちゃうから小林君に頼むって言われて、僕と一緒に個別で面談しようっていう形で実現した面談であったり。これは実際に中学校で、奥にいるニコニコしているのが大学生なんですけど、放課後の時間を使って授業とは違う場で、授業とは違うものを使って学べる。じゃあ何で学べるかなっていうところで、思考クイズを使って学んでいる様子。ほとんど遊んでいるんですけど、こういうの大学生だから出来る場を提供してあげる。あとは、教材開発っていうのもやってみたりしました。けっこう、つまづいている子ども達が多くて、中学生なんですけど九九が出来ないとか、分数が出来ないとか。でも小学校に戻って授業を受け直すわけにはいけないので、中学校でやらなきゃいけないでしょうってなったときに、僕達大学生が、先生方は中学の内容を進めていかなきゃいけないので、僕達が小学校の内容に立ち返って、九九について説明する動画とかを作って、ある意味塾っぽく言えば塾っぽいですけど。これ一般に公開しているの、是非、もしご興味があったら、上に書いてある、オフスクールっていう名前を検索して頂ければ見れるんですけど、プリントもあって、そのプリントの解説も作っているっていう活動をしてみたい。あとは、最近だと高校受験が2月の23日とかにあるので、それに向けて今都立高校の入試対策をしています。横にある棚なんですけど、あれ1つ1つに各教科の、直前にこれやっつけ、みたいなプリントを学生が作って入れておいて、それを生徒が解いたら合格ポストっていうのが上にあるんですけど、あそこに投函すると、赤ペン先生にみたいに丸付けして子どもに返してあげる、み

たいなやり取りをしています。あと、こっちは補習活動。その補習活動のときに、授業に来てくれた3人の生徒が写っています。あとは、地域と交流するっていうので、へき地教育ってところで、先程からも地域、地域ってお話があったと思うんですけど、やっぱり東京都だとなかなか地域ってところまで意識がいきにくい部分があって、僕達その点自由な身分なので、学校の先生みたいにたくさんやらなきゃいけないお仕事があるわけでもないで、じゃあ外に繰り出してみようって、学校がなかなか踏み出せない地域との連携を僕達が間に入って出来たらいいんじゃないかっていう話で、外に何か変な奥に灰色のがあるんですけど、基地を作って、そしたらおじいちゃんが来て。このおじいちゃんは後で聞いたら、今僕達が中学校の中で1、2を争うボスザルみたいな男子がいるんですけど、その男子のおじいちゃんだったんですね。そういう中で昔の話を聞いたり、今の地域と昔の地域はどう変わっているとか、地域は本当は学校に対してこう思っている、みたいなのを学生が吸い出したり、学校にはなかなか怖くて報告出来ない部分もあるんですけど、そういった活動もしています。

今が様々な関わり方についてのご紹介なんですけど、色々な活動が出来るっていうのは、自由な関わりが出来るっていう立場であるっていうのと、長期的なスパンで関わることが出来たっていう意味でも、今みたいな色々な活動が出来たのではないかと思います。やっぱり2年間ずっといると、学校が改めて現場って生きているみたいな意識が凄く改めて感じられて、だからこそ3週間ではなかなか気づきにくいような変化みたいなものに気付いたり、その問題に先生とは違う立場で関わったりっていうことが出来ました。

さっき途中、中妻先生のお話でちょっと先程あったので、追加でさっき勢いで入れちゃったんですけど、以前この関わりについて発表した時に紹介した数字なんですけど、これ僕のGPAなんですけど、大学1年があっちの2個、大学2年がかっちの2個。どんどん衰退していったんですけど、関わった後で、漠然と貯えないといけないと思っていた知識、多分自分にはないだろうなって思っていた知識が、ジグソーパズルのピースがなくなっているみたいに、学校現場に行くと、これが僕にない、みたいなのが凄く明確になってきて、それについて勉強しているうちに、成績も結果的に上がったっていう、数字的なデータもあったので、自分の成績をさらすことで恥ずかしいんですけど、こういうこともありました。是非参考にして頂けたらと思って入れました。

では改めて、一般的な教育実習とボランティアについて比較することで、改めて教育実習について振り返りたいと思います。資料の方にも表みたいなのを入れたと思うんですけど、その表をそのままここに映しています。なので前をご覧頂ければ色付きで見れますのでこちらでご覧下さい。教育実習とこのボランティアを比較するときに、期間、関わり方、活動って3つで比較すると、このように大

きな違いがあると。今までの僕の発表を聞いて頂いても、言葉の端々にあったと思うんですけど、これを通して僕が凄く感じたのは、今の教育実習の仕組みについてちょっと一歩引いて考えているというか、まだ自分も教員になっていないのにあれなんですけど、教育実習だけで、これからすぐ2ヶ月後に教員になる友達が目の前にいて、自分はこういう活動をしていて、自分よりもっと色々な活動をしている学生がいてっていうときに、どうやってそれって質として保証されるべきなのか、そもそもそれって大学側がやるべきなのかとか、最近はそのことばかり考えるようになっているんです。それで例えば、実習を増やせばいいってなっちゃうと、これでいうところの先生として関わるところが増えるだけで、僕が経験したような先生ではないような関わり方だったりとか、外の人だからこそ、ある意味アウトローみたいな関わり方で問題にアプローチ出来る、例えば、動画教材を作っちゃうとか、そういう取り組みをすることで、後で自分が教員になったときに、これから先そうやって色々なものが教育現場に流れ込んでくると思うんですけど、そういうものについても改めて考えられるのかなっていうふうに思いました。

まともになくなってきちゃったんですけど、大体こんな感じで僕は、一般的な教育実習っていうものと、自分が経験したボランティアの経験を比較することで、改めて自分の学校での実習ってどういうものだったんだろうかっていうのを振り返りました。詳しいことに関しては、資料の中に書いてありますので、そちらもご覧下さい。それでは、鱒坂さんに発表を移ります。

【報告者】鱒坂 恵理（初等音楽専攻）4回生  
実習校：大島町立つばき小学校



【東京学芸大学②】

東京学芸大学教育学部初等教育教員養成課程音楽専修4年の鱒坂恵理と申します。今日はおよろしくお願ひします。へき地学級での実習を終えて、4年間の学びと共に今後の教育について考えるということで、10分間程度お話をさせて頂きたいと思ひます。スライドを資料として挙げさせて頂いた中から、かなり変更がありまして申し訳ないんですが、こちらのスライドを見て頂ければと思ひます。

私はフィリピンでのエル・システム教育と伊豆大島での

つばき小学校の教育実習の1つの観点から教育を考えました。4年間の学びということで、少し私の4年間について話させて頂きたいと思います。私は音楽専修ということで、ピアノ専攻として学芸大学に入りました。ですが、大学に入ってオーケストラをやってみたいと思い、チェロを、バイオリンの大きい楽器ですね、チェロを大学から始めました。その中でピアノはご存知の通り、1人で弾く楽器なので練習も1人でし、レッスンも先生に教えてもらってからはずっと1人、リハーサルも本番も1人という環境でやっています。その中で新しく始めたチェロという楽器は、オーケストラの楽器でもありますので全員で練習したり、全員で話し合ったり、教え合ったり。本番もリハーサルも全員で作りに上げるという音楽の形になります。そのチェロを大学でオーケストラとして出会い、教え合うこと、作り上げるステージの感動というものを学びました。その中でちょうど3年生のときに当たるんですけども、NPO法人のエル・システム教育をやっているNPOに声を掛けて頂きまして、フィリピンでのエル・システム教育に携わるようになりました。エル・システム教育というのは、今音楽の分野で凄い注目されているので、ご存知の方も多いかと思うんですけども、音楽、私みたいにチェロを頑張る、ピアノを頑張る、1つの楽器を練習して、本番を作り上げることによって、協調性であったり、忍耐力であったり、人と協力すること、先生の話聞くこと、時間を守ること、人前で発表するという経験を積むことによって、社会性を身につけようという教育です。言葉で見ても、文章で見ても堅苦しいと思うので、次の動画を見て頂きたいと思います。

この動画はベネズエラで生まれたエル・システム教育なので、ベネズエラの指揮者とベネズエラで学んだ子ども達が、今演奏している動画になります。日本の学生や日本の社会人、常識のある人から見ると、まず違和感を持つのはこの服装であったりとか、演奏中に立ち上がったたりしてマンボって言うことだったりとか、色々あると思うんですけども、やっぱり音楽をする楽しさっていうのを体で実感して表現していると思い、凄い私はこの動画に感動を受けました。少し長いので飛ばします。

ベネズエラで生まれたこのエル・システム教育をフィリピンに持っていき、セブ島というところで、私は子ども達に教えていました。右上の子どもは小学校2年生7歳ぐらいの子になります。この右下の子ども達は今エル・システムの教育を今受けている子ども達なんですけど、左の写真にあるように、セブ島というリゾート地っていうイメージがあると思うんですけど、一本路地裏に入るとゴミ山が広がっていたり、この子ども達もスラム街の子どもであったりします。ほとんどの子が毎日生きていくので精一杯で、自分のことしか考えられない、人に何かを恵むことさえも頭の選択肢からなくて、自分が生きていくために物乞いをしたりとか、窃盗をしてしまったりとか、シンナーをやっていたりとか、ギャングに入っている、スラム街で毎日暮らしているような子ども達です。その子ども達に出会って、最

初私も物乞いをする相手だったんですけども、そういう相手ではない、自分が音楽が出来るようになるっていう、経験を子ども達が実感することによって、キラキラした目で子ども達は、今日は何を教えてくれるのっていうふうにならびいて、自分の成長にも役立っています。この1年から2年にかけて、エル・システムの教育を通してこの子ども達と関わってきて、私はこのへき地教育、伊豆大島でのつばき小学校での教育実習を表現を出来る場、認められる機会を作ってあげられる場所、そのことによって自己肯定感の育成が図れるような実習にしたいなというふうに私は考えて、へき地学級の教育実習に臨みました。

伊豆大島のつばき小学校なんですけれども、私はここに来るまで、伊豆大島のつばき小学校がへき地学級であるということを知りませんでした。このフォーラムに招いて頂いて、つばき小学校はへき地だったんだなっていうふうを感じるぐらい子ども達が生き生きして、人数もそこまで少なくありませんでした。1学級20人ぐらいだったので、単式で毎日ワイワイと授業を進めることが出来ていました。

実習が始まる前の様子から、少しお話をさせて頂きます。まず東京都では応用実習がありまして、公立の協力校で3週間実習をさせて頂いています。その際に、島希望、島嶼希望というのを取っていて、島で実習をしたい人に対してまず説明会を開いて、その中で予算がどれくらいかかるかありますとか、日程的にどういう条件っていうのが決まってきました。私の年の場合は、説明会には10何名いたと記憶しています。その後で費用がかかることで辞退をしたり、考えが思っていたのと違うという理由で辞退者が出て、最終的に残った各自でYESエントリーシートを出し、そこで選考にかけられて結局今年は4人、小笠原諸島に2人、伊豆大島に2人という形で4人が選ばれました。その後なんですけれども、つばき小学校に先生と連絡を取り合って、単元などを教えてもらおうと思ったんですけども、ここのスライドにもあるように、単元は言えませんと言われました。予習も必要ありません、ただ、元気な体で3週間出来るように初日から来て下さい。この言葉だけで3週間が始まりました。なので私は自己紹介、音楽科なので、ピアノは持っていけないと思い、リコーダーソプラニーノ、ソプラノリコーダーのもっと小さいやつから、ソプラノリコーダー、あと、バスリコーダーっていう、ファゴットみたいにこれぐらいあるんですけど、そのリコーダーを持って行って1年生の前で演奏しました。軸として表現の場と認められる機会の設定、そのことで自己肯定感を育成したいというふうに考えていたので、その表現を私がすることによって、子ども達が何を表現してくれるのかなっていうのを軸において、教育実習に臨みました。なので、その日から朝の歌、帰りの歌をキーボードで私が弾きながら皆に歌ってもらったりとか、朝の時間、休み時間にはリコーダー吹いてって言われた曲に対して、吹きながら皆で歌ったりっていう活動をしながら、クラス運営をしていきました。土曜日、日曜日には学校の先生が車を貸して下さったので、大

島1周道路という、大島に通っている大きな国道があるのでそこを通過して、社会の子と一緒に地理を学びに、土曜日、日曜日は伊豆大島に出掛けました。

最後の研究授業なんですけど、私は国語を研究授業としてやりました。なんですけれども、ただの国語だと、やっぱり私の軸には合っていないなと思ったので、音楽と絡めて、国語と音楽の効果授業として、おむすびころりんをやりました。おむすびころりんというのを皆さんご存知かと思うんですけど、おむすびころりん すっとんとん、ころころころりん すっとんとんっていう、リズムが良く使われている教材でして、1年生の内容としては意味を理解するよりも、リズムを体で感じ取るということに重点を置いている教材でしたので、手作り楽器や皆が思う楽器を持ち合わせて、皆にリズムを考えてもらったり、友達と5人1グループを作って1列に並んで、私はこのときに茶碗を2つ持って、すっとんとんでパンパンってやるっていうのを子ども達に決めさせて、それで暗譜をして、皆の前で発表するっていうことを教材研究のテーマとして選んでやりました。右上にあるのは違う演目なんですけど、こんな感じで21人の子どもがそれぞれグループを作って発表することが出来ました。

最後になりますが、教育現場に求められているものは、やはり私の軸である、自己表現の場と認められる機会の設定だと思います。やっぱり子どもはフィリピンのセブの子どもでもそうですし、日本の子どもでも世界中の子どもが認められることに飢えていると思います。そのためには、認められる場所を設定してあげることが前提になってくるんですけど、その前にはやっぱりその子ども達が自分を出す機会を持たなければ、こちらとしても認めてあげられるっていう前提には結び付かないと思うので、自己表現の場、自己表現の仕方を教えてあげて、認められる機会の設定をこちらが作り、そのことによって子ども達が、ここにいていいんだ、自分はこれをやりたいからやれるんだっていう自己肯定感に結び付けられることが、今後の教育に求められているんだなと感じました。ご清聴ありがとうございました。

## 報告Ⅱ 司会：西村

ここで質問の方に移りたいと思います。今の発表を受けて質問、ご意見、もう少し聞きたい、ありましたらお願い致します。

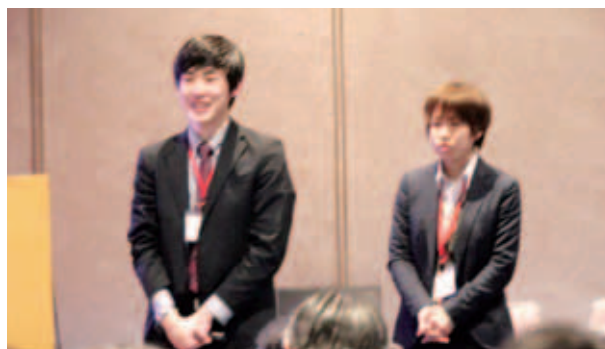
## 内山（北海道教育大学 釧路校）

北海道教育大学釧路校の内山と申します。小林さんに1つ伺いたいと思います。小林さんの発表の中で凄くなるほど思ったことがあります。そのSTボランティアの体験を通して、自分のジグソーパズルのピースで自分に欠けているものを発見したというようなお話があって、なるほどと思ったんですけど、そこで1つお聞きしたいのは、そういう自分の課題発見というのが凄く大事だという

ことは、私も思っていて、実は私は東京学芸大学の附属小学校で19年、基礎実習を担当していたんですね。その中で学生さん達に願っていたのは、まさにその3週間を通して教師としての経験を通して、自分の課題、自分にどういう良さがあり、或いは自分にどういふ欠けている、それこそそのピースがあるのかっていうことを発見してほしいなと思ってやっていたんですけど、小林さんが基礎実習ではなく、STボランティアでそれを発見したっていうのは、何がその発見に繋がったのかっていうことを是非お聞きしたいなと思いました。

## 小林

ありがとうございます。やっぱりSTボランティアだとそもそも関わり方がたくさんあるので、例えば基礎実習であれば、附属の実習であれば、それこそ極端なことを言ってしまうと、授業をするために指導案を書いて、実習日誌を書いて、最後に単位がもらえれば、最低限って意味ではある意味取れるじゃないですか。そういうことだと、授業は自分は出来ないとか、例えば生徒指導が自分の中ではまだ未熟だっていう課題にはぶつかると思うんですけど、STボランティアではもっと違う、いきなり腕掴まれて親のことで相談があるとか、そういう突然の問題にたくさん出会うことが出来て、その問題を解決しようとしたときに自分に足りない力があるっていうことに、気付けるきっかけがたくさんあるというか、期間もそうなんですけど、立場としても授業以外のことでも、色々な教育現場のものに対して関わられるので、必然的に自分の能力の欠けている部分に気付けるチャンスが多いのかなっていうふうには感じます。お答えになっているか分かりませんが。



〔東京学芸大学③〕

## 内山

ありがとうございました。私は附属の実習で3年生の実習をしたときに、このままじゃ自分は教師になれないと思って、それから勉強するようになりましたので、自分の原点になっているんですけど、そういう意味での気付かせてもらう経験の幅みたいな、そういう部分がSTボランティアにはあるということが分かりました。ありがとうございました。

## 小林

ありがとうございます。

## 報告Ⅱ 司会：西村

その他ご質問等、お願い致します。

## 川上（北海道教育大学 釧路校学生）

北海道教育大学釧路校の川上と申します。発表ありがとうございました。鰺坂さんへの質問になるんですけども、伊豆大島での実習ということで、島嶼地区の子ども達にとって、恐らく都会への憧れですとか、そういったものってひょっとしたらあるんじゃないのかなっていうふうに考えたときに、鰺坂さんは自己肯定感のことについて中心に述べられていたと思うんですけども、都会の憧れと共に島で生きていくってということが1つその子ども達に求められる課題といえますか、重要なものになってくると思うんですが、その島に生活しているということで、子ども達自身がその島に存在するという居場所作りだとか、その地域に根ざしているとか、愛着を持っているということが自己肯定感の育成とか、認められているかってことに繋がりがちょっとあるような気が私はしていて、そういった意味で鰺坂さん自身がこの実習を通した中で、その子ども達が居場所だとか、その地域に対する愛着を持っているんじゃないかなっていうふうに感じた場面等がありましたら、その自己肯定感のことと含めまして、ご意見もしあればお聞かせ頂きたいなと思っています。お願いします。

## 鰺坂

ありがとうございます。実習中の期間に、私のクラスの児童が2日間東京に行くという日がありました。理由なんですけれども、伊豆大島の事情としては歯医者さんがないということで、歯医者さんに行くために2日間学校を休まなければいけないという事情があって、2日間お休みを取っていました。その際、学校側も地域側も、何だよ、休んでってということでは全くなくて、帰ってきた子どもの話を聞くと、歯医者さんに行ったときに映画も見てきて、ディズニーランドにも行って来たよって、先生にわざわざ報告してくれるんですね。それを凄い嬉しそうに話していて、多分都会へのプラスなイメージはあると思うんですけども、私が東京から伊豆大島に来たってことを初日に知ったときの子どもの反応を見ると、伊豆大島のこれが美味しいんだよとか、ここに行ったらこれに会えるよとか、先生って何々って知ってる？というふうに伊豆大島の良さを子どもが色んなところから拾ってきてくれて教えてくれる、ということがとてもあった3週間だったので、都会に憧れを持っている部分も勿論あるんですけども、伊豆大島にも愛着があって、それを踏まえて自分の居場所を作っているという感じは受けました。

私が生み出したかった自己肯定感なんですけれども、大島、都会としての土地の原因ではなくて、私は授業の中だっ

たり、生活指導の中でそれを作り出せたらいいなと思っていまして、実習3週間の中では見えなかった子どもの面もあると思うので、過去の図工の作品だったり、国語の作文だったりっていうのを色んな先生を回って教えてもらって、この子ってこういう側面も持ってるかもしれないっていうのを自分の中でイメージしながら、最後1人1人に、何々さん、何々を頑張っていたね、っていう歌詞の曲を作って、子ども達が考えたクラス目標があるんですけども、学校が決めたクラス目標ではなくて、子どもが自分達で決めたクラス目標をサビにして、1番、2番、3番っていうのをメロディーと伴奏を作って、自分で演奏しながら、最後の日に1人1人のフレーズのところは、1人1人の目を合わせて歌うことがあったんですけども、その時に、やっぱり私のことを見てくれていたんだっていうのも凄い感じることが出来ましたし、先生何でこれ知っているの？私そのとき、先生に見せてないのっていう反応ももらったときに、やっぱり子どもは自分のことを見てくれていたんだっていう安心感と、満足な気持ちが自己肯定感に結び付いているのかなというふうには思いました。以上です。

## 川上

ありがとうございました。

## 報告Ⅱ 司会：西村

東京学芸大学の発表、一区切りさせていただきます。どうもありがとうございます。

続きまして、愛知教育大学、準備の方お願い致します。

〔報告者〕石川 恵理（教職大学院）2 年生

実習校：愛知県みよし市立黒笹小学校



〔愛知教育大学①〕

今回はサポーター活動と教師力向上実習について紹介します。よろしくお祈いします。本日パワーポイントはございません。お手元の資料をご覧ください。これは大学院2年間のカリキュラムの中で、サポーター活動と教師力向上実習1と2を取り出して示したものです。補足になりますが、カリキュラムには今から説明するサポーター活動と教師力向上実習ⅠとⅡ以外にも、後ほど今村より紹介があ

る、特別課題実習やフィールド実習、教師力向上実習Ⅲという実習が含まれます。

まずはサポーター活動について紹介します。サポーター活動とは、連携する愛知県内の小中学校で大学院の1年目の9月から2年目の12月まで、16ヶ月に渡り、週に2回月曜日と木曜日に行うボランティア活動です。活動の内容は資料の1ページ目の2に示しました。授業中の個別指導や宿題やテストの丸付け、教材作りや掲示物の掲示、実習の指導と部活動の指導、行事の指導等です。詳細については、資料の2ページから6ページをご覧ください。私のサポーター活動について少しお話しします。私は愛知県の人口6万人のみよし市、県庁所在地の名古屋市の隣にある、みよし市でサポーター活動を行いました。開校9年目の新しい学校で各学年3クラス、600名近い児童が在籍しています。学区には新しい住宅街が建ち並び、海外から帰国した児童も多い学校です。活動の中で様々な児童の姿を見てきました。活動が始まった当初は、授業中に席を立ち歩いたり、担任の先生に反抗的な態度を取ったり、どんなことに対しても無気力なように見える児童にとっても驚きました。しかしサポーター校の先生から、それらの姿を一人一人の特性として捉え、どのような支援が必要かという視点で児童を見ることが大切だと教わりました。また教科の個別指導の際には、国語の漢字プリントの丸付けで難しさを感じました。丸付けでは公正や平等が大切だと考え、漢字には間違いがないか、テキストに書かれている止め、はね、はらいがきちんとされているか、という基準で私は丸付けを行いました。しかしそのような基準で丸付けを行っていると、全てがバツになってしまうプリントがありました。全てにバツを付けてしまったら児童の学習意欲をそいでしまいます。そこでその児童に対しては基準を下げ、出来ている部分には丸を付けてあげられるようにしました。そして児童が字をなぞって正しい漢字を覚えることが出来るように、漢字を書いてあげました。このような支援で児童にあきらめずに継続して、学習に取り組ませることが出来たと思えました。

次に教師力向上実習について紹介します。教師力向上実習とは、サポーター活動を行っている学校で、6月と10月に行う実習です。6月には学級づくり、10月には授業づくりについて集中的に学びます。主な実習の内容は、資料1ページ目の3に示しました。朝の会の先生の話や日記の朱書き、学級活動や道徳の指導と単元を通しての教科の指導です。私は教師力向上実習Ⅰの学級づくりの実習では、その当時流行ったディズニー映画のアナと雪の女王の扉をあけて、という挿入歌を教材に、歌を通してクラスの男女の仲が深まることねらいとして、学級活動の授業を行いました。映画を見たことがある児童も多く、児童はとても楽しそうに授業に参加してくれました。授業は教室ではなく、音楽室で行ったために開放的になってしまい、伸び伸びとした児童を説明のときに静かにさせることに苦労をしました。授業の構成を考える段階からこのような児童の動きを想定して、説明がしっかり聞けるような展開にしなければ

ならないことを学びました。

教師力向上実習Ⅱの授業づくりの実習では、4年生の連詩に挑戦しようという単元で実習を行いました。学級の中には多動の児童や人との関わりが苦手な児童がいました。そのような児童も含めた全ての児童が参加出来る授業を目指しました。連詩の起・承・転・結という連ごとの役割を絵で示したり、詩を書き出す前に十分な時間をとって、視覚的にイメージが広がるようなワークシートを用いて、言葉集めを行ったりしました。また、詩を書くときには事前に書きたい題のアンケートをとり、書きたい題が同じ児童同士でペアを作り、相談させながら連詩を書かせました。このような工夫をしたことで、特別な配慮が必要な児童にも分かりやすい説明となり、学級の仲間と共に意欲的に取り組めるようになり、全員が参加出来る授業を作ることが出来たと思えました。

教師力向上実習Ⅰの期間には運動会があり、教師力向上実習Ⅱの翌月には合唱フェスティバルがありました。一つの行事を行うための事前の準備から学ぶことが出来ました。運動会の準備は1ヶ月前にYouTubeの動画を参考に踊りの振り付けを考えました。児童が帰った後の教室で踊りの練習をし、踊りを覚え、次の日には体育館のステージで見本を見せ、児童に指導をしました。加えて、児童に踊りを教えることと同時にフォーメーションを考えたりもしました。運動会の直前には学年の練習だけでなく、全校の練習も始まり、毎日児童が帰った後のグラウンドのライン引き等も手伝いました。限られた期間の中で中身を作りながら、教えながら、同時進行で仕事を進めなければならないことを目の当たりにしました。

以上、説明したように、愛知教育大学教職大学院では週に2回、16ヶ月にわたり、サポーター校に通い、慣れたサポーター校で合計2ヶ月にわたる実習を行っています。このような環境で経験を積んだことで1人1人違う特性を持った児童がいるということを知り、目の前の児童の特性に合わせた指導を行うことの必要性を学びました。それと同時に児童の姿を記録に残し、その記録を基にした継続的な指導の必要性を学びました。また、4月の入学式から運動会、合唱フェスティバル、卒業式といった、1年間を通した学校の動きを知ることも出来ました。更に教師としてや大人としての振舞い方まで、親身になってご指導頂ける先生方に会うことも出来ました。私は4月から教員として働きますが、教職大学院で学んだ指導技術を生かせるように、そして自らの課題を克服出来るように頑張りたいと思います。以上でサポーター活動と教師力向上実習の発表を終わります。



〔報告者〕今村 真弓（教職大学院）2 回生

実習校：愛知県豊田市立東保見小学校



〔愛知教育大学②〕

次に発表させていただきます、愛知教育大学教職大学院の2回生の今村真弓です。よろしくお願ひします。次に発表致しますのは、在日外国人の学習はどのように行われているか、ということについて報告させていただきます。こちらの在日外国人の学習について学ぶ機会となったのは、先程石川が発表致しましたレジュメの1枚目の表にございます、院の1年目M1の10月に実施される特別課題実習というもので学びました。愛知県は約5800人の外国人児童を抱えており、日本でも一番外国人児童が多い県となっています。今後、愛知県やその周辺の都道府県で教職に就く者として、外国人児童に対してどのように支援や指導をしていけば良いのかということ学ぶためにもこの実習が設定されています。実習校は愛知県豊田市の東保見小学校でした。豊田市はトヨタ自動車の工場があり、その関連工場をはじめとした工場に働く外国の方が多く、豊田市内には外国籍の方の子ども達がたくさんいます。

実習した内容についてお話し致します。通常学級には外国人児童が数名いて、そこでの学習の様子や生活の様子について、あと、取り出し指導。取り出し指導というのは、まず入学時に、子どもに簡単な言葉のキャッチボールが出来るか、自分の名前が言えるか、自分の名前が書けるかというような適性の検査を致しまして、そこから取り出しの指導が必要となった子どもに対してやっている支援です。そして放課後支援教室というものがあります。放課後支援教室は学校の全部が終わった後に、子ども数人と教師が学校に残って支援をする時間です。あと、言葉の教室というものがあります。言葉の教室というのは、東保見小学校にはなく、隣の西保見小学校で設置されているものです。外国人児童を大きく分けると三つに分けることが出来まして、まず一つは、生活言語、学習言語共にある程度習得出来ている子ども。二つが生活言語は習得出来ているが、学習言語の理解が乏しい子ども。もう一つが生活言語、学習言語が共に乏しい子どもに分けられます。その三つ目の、生活言語、学習言語が共に乏しい子どもで、日本語の初期指導が必要と判断した子どものみ、言葉の教室に数回にわたり通わせて指導が行われています。それぞれの場の中に

おける児童の実態に応じて、教師の指導・支援について、授業面と生活面と様々な角度から日々のコミュニケーションや授業の観察、T2として授業に参加することをしました。また、通常学級での授業実践を通して学びました。私は第1学年に入らせて頂きまして、授業実践は、算数の足し算の単元で、1回しかすることは出来ませんでした。

次に、子どもの実態についてと、その子ども達に対する教師の指導や支援がどのようなものだったかということ、この2点についてお話したいと思います。まず1点目の子どもの実態についてです。学級の児童の様子は、外国人児童の良さはどのようなものだったかと言いますと、私が入らせて頂いたのは1年生の学級でした。その学級に所属する外国人児童の子達は学校が好きだ、学校は楽しいと言っており、学校生活で苦に思っていることはないように思いました。しかし、私の実習前のイメージとしては、外国人児童ということ、何か生活面とか学習面で大変に思っていること、苦勞していることがあるんじゃないかなと疑問に思ったので、担任の先生に聞いてみたところ、入学当初は友達と関わるのがなかなか難しく、ちょっとぶつかったりですぐ手が出てしまったり、暴言を吐いてしまったりという様子があったようですが、日々、他の子ども達と関わり合い、生活していくことで、最近では友達のことを思いやって、もしぶつかってしまったときもすぐに他の子ども達よりも先に、ごめんね、痛かった、大丈夫等といった、言葉掛けが出来るようになったという成長を聞きました。

次に、取り出しの児童の様子についてお話しします。取り出しの指導の児童の様子では、どの子どもも生き生きとしている印象を受けました。大きな部屋の中で、1年生は4クラスあったので4人、他の学年も3人だったり2人だったりの編成の学級ですけれども、教室中に大きな声が響いていました。子ども達は学習に対しても意欲がとてもあり、バンバン手を挙げて発表している様子もありました。それを見て私は、通常学級の子ども達と比べて、エネルギーがとて大きくて凄いなと感じたので、それを直接、取り出し指導の担当の先生に伝えたところ、その先生はこうおっしゃっていました。児童達は、通常学級では解放出来ない自分を取り出し指導の学級の中で解放しているということをお聞きしました。大抵の児童は通常学級では、自分を抑えてしまっていて、殻にこもったりしがちです。本人が気付いているかどうか分からない、ストレスを抱えているものを取り出し学級の教室で解放していることを知りました。表面上では学校に対して、苦しいとか、こもっているなっていうような感じを持っていないと思っていた子どもも、実は底の方では困り感を抱いているのかもしれないということに気付きました。見えない面での子どもの見取りということが、今後教師となっていく上で大切なのだと感じました。

外国人の子ども達は先程言ったように、外国人児童の中でも様々な違いがあります。言語的な発達も様々で、取り出し指導が必要な児童がいたり、通常の学級の中でもつい

ていけない児童がいたり、取り出し指導が必要なレベルであるけれども、通常学級の方が他の子どもと関わることで、伸びそうな児童がいたり様々なので、東保見小学校ではそれを学級担任と、担当のコーディネートをされる先生と相談をする中で決めていっていることを学びました。

次にどのような支援をしているかについてお話します。東保見小学校で過ごしている子ども達は、今後大人になっても、豊田市とその地域で生きていく子ども達がほとんどです。ここで掲げているのが、進学、就職が出来る外国人児童の育成です。その地域に根ざした教育をしていくことを柱としていっていると伺いました。そのために先生方は、普段子ども達は家庭では日本語を用いる環境が少ないので、まず日本語に慣れることから始めなければならないと考えているので、日本語のシャワーを毎日、毎日子どもに浴びせていくことが大切だと、そういうことを意識して指導をしているということを知りました。

次に、個別支援についてお話します。個別支援の中でも放課後支援教室に参加させて頂きました。児童個々に合った宿題が決まっており、マンツーマンで指導をしています。マンツーマンで指導をしていくときに1つ課題が出来たらすぐ、出来たね、良かったね、素晴らしいねと、褒め、それを繰り返すことによって子どもは誰かに見てもらっている、見てもらえているという安心感や充実感が生じます。ここで生じた安心感や充実感が子ども達の今後の学習の意欲に繋がっていくのだと感じました。

最後に一斉の支援についてお話します。私が入らせて頂いた1年生の学級の外国人児童は、授業進度についていけないわけではありませんでしたが、ただ学習用語の意味が分からないことが少しありました。ですから自分が実践するときも意識したのですが、一つ一つ場面止めながら、この意味分かるかなという言葉を意識する授業をしました。また学級の先生がおっしゃっていたのは、机間指導をして、1人1人に取りこぼしが無いかということを支援していくことが大切だということが分かりました。それ以上に印象に残ったのが、外国人児童の子だけではなく、日本人の児童にも学習の面での支援が必要だということを感じました。外国人児童という枠に当てはめて、外国人児童に対して支援をしなければならないというような固定概念は捨てて、学級の中の一人という個で捉えて、他の子と変わりなく、一人一人のニーズに応じた支援や授業づくりが学級のどの子にとっても分かりやすい授業になるのだなと感じました。

特別課題実習を終えて、児童を児童のカテゴリーに当てはめて、ひとくくりで見ないこと、1つの学級で児童達が関わり合う中で育てていく意識を忘れないというこの2点が強く私が思ったことです。今後は隣の三重県で教員をするのですが、そこもやはりブラジル国籍の子ども達が多く、色んな子ども達がいる学級で今後教育をしていくことになるんだなと思っています。この2つはどの学級を持って、根底として同じだと感じています。この2つを忘れずにより一層に多角的な児童理解を深めて、児童一人ひとりの持

つ個性を生かした学級となるように、学級づくりや授業づくりをしていきたいと考えています。以上です。

## 報告Ⅱ 司会：西村

石川さん、今村さん、ありがとうございます。それでは今の発表をうけまして、ご質問等ありましたらお願い致します。



〔愛知教育大学③〕

## 質問者

どうもありがとうございました。大変興味深く聞かせて頂きました。石川さんにちょっとお聞きしたいんですけども、16ヶ月のサポーター活動に入ったときの実態は、凄くショッキングだったという状況を聞いて、先程1人ひとりの違いを個性として認めて、それに適切な指導をしていくことが大事だということを学ばせて頂きましたという話だったので、16ヶ月後、その子達はどんなふうに変容したのかなってお聞きしたいと思いました。

## 石川

ありがとうございます。まず私が子ども達を見る視点として、多動であったり、暴言を吐いたりする子ども達を目の前にして、本当の学校現場の課題というか、難しさというものを素直に感じて、驚きました。しかし、驚いているだけでは教師として存在する意味がないので、それに対して自分の捉え方として、特性として捉えられるように務めました。子どもの姿ですけれども、やはり2年間を通して学年を終えて、継続的に見ることが出来、3年生から4年生に変わる時期ですとか、4年生から5年生に変わる時期の子どもの成長をとっても感じました。それは日頃の先生方の指導と加えて、成長段階的にやはり凄く変わるんだなと思いました。具体的には、例えばクラスの中で暴言を吐いたり、立ち歩いたりする子が、1年後に3年生から4年生に上がった段階では、クラスの中では立ち歩かずに授業を聞くことが出来るようになったりですとか、他の学級に迷惑をかけたという話題も聞かなくなるようになったという児童の変化も見られました。以上です。

## 質問者

ありがとうございます。たぶん教育の育の方の育むって

ことで、待つのに凄い時間が掛かって不安もあったんじゃないかなと思ながらも、そういうお話を聞かせて頂けてありがとうございます。

### 〔報告Ⅱ 全体講評〕

阿部 二郎（北海道教育大学 へき地教育研究支援部門 函館校センター員）

皆さんこんにちは。北海道教育大学函館校の阿部二郎と言います。どうぞよろしくお願ひします。時間とも関係あるかと思うんですが、出来るだけコンパクトにお話をさせて頂きたいと思ひます。まず第1にこの内容を拝見したときに、学年も2年から院生の方までいて、内容というかテーマが幅広くて、一体何を講評すりゃあいいんだと実は戸惑ったんですが、良く考えましたらほぼ全ての私の研究領域なんです。ですから非常に面白く聞かせて頂きました。あえて申し上げますと、皆さんは大変ではなかったでしょ、今日の発表も。面白かったんじゃないかと思うんですよ。もしこれを大変だというなら教員にならない方がいい、とさえ私は思っている人間ですから。実は偉そうに喋っているのは、私も中学校教員20年程やって、現職にきているものですから、今でも教員っていうアイデンティティーです。その意味で後輩にあたる方もいるものですから、北海道教育大学と学芸大学は共に私の後輩ということになりますので、愛教大の方はごめんなさい、ちょっと違うんですが。それでまずテーマを皆さんにちょっと確認をして頂きたいんですが、へき地小規模校ですよ。このテーマは非常に私自身がやっている中身から考えても、自分のことなんです。ちょっと別な質問をします。日本で人口の多い都市、上から言えますでしょうか。東京、大阪、名古屋。東京学芸大、大阪教育大学、愛知教育大学、名古屋すぐそこにありますから。何と大都市にある大学がこのテーマでやろうとしている。4番目の都市って皆さん分かりますか？札幌市なんですよ、194万人です。何故こんなことを言うかという、本州の方意外とご存じない。北海道は3人に1人が、道民の3人に1人以上が札幌市民なんですよ。凄い特殊なところですよ。私の住んでいる函館校、それから旭川校、共にここに北海道教育大学のキャンパスがありますが、これは地方中核都市です。全国に43ありますが、政令指定を別にすれば、ここ釧路は実は4番目のはずなんです、人口からいうと。もう1つ、名前聞いたことあると思うんですが、岩見沢というところと釧路、ここに北海道教育大学のキャンパスがありますが、そこに小樽という名前も聞いたことあると思うんですが、この6つの都市を合わせますと、北海道の全人口の6割を超えちゃうんですよ。北海道というところは九州の約2倍の広さがあります。九州には7つの県があります。北海道には14の市町があります。ですから北海道の行政と市町というのは、九州でいうと県の感覚になるんですよ、とてつもなくでかい。そのでかい中では北海道教育大の学生さん、午前中ご苦労様でした。色々面白かったんですが、色々な実践をされているんですが、特に北海

道教育大学の学生さんと、また交流がこの後あると思ひますので、是非聞いてみて下さい。北海道の学生は北海道がへき地だという意識を持っていません。ただ沖縄と北海道は共に開発担当大臣が指定されている都市です、未だに兼務していますけどね。ということですから、北海道全域がへき地だという実情もあるだろう。でもその中に全国4番目の人口の町がある。非常に面白いと言えば面白いところですよ。その中でこの研究を色々進められてきているという状況があって、ちょっと紹介も兼ねて、そういうお話をさせて頂いたんですが、へき地という場合に、これは地理的な問題が大きいですよ。それに対して小規模校という場合は、へき地性は関係ない場合があります。例えば私が東京都に勤務していたときは、中央区銀座、ここは非常に小規模学校が多かったです。銀座、中央区は区外から通っている人達もいました。ですから、大都市であっても実は小規模校っていうのは存在する、過疎性の問題ですよ。この2つが組み合わせると、少なくとも3つの組み合わせが出来ます。へき地だけの場合、それから過疎性だけの場合、へき地と過疎性の場合。北海道はへき地と過疎性がかなり重なっていますが、さっき大都市であっても過疎性の問題というのは、決して感化出来ないであろう。尚且つ皆さんが教員になってからは、昨年統廃合のガイドラインっていうのが見直されました。ですから一気にこの先進んでいく可能性があると思うんですが、その時必ず規模が小さくなっていくときに過疎性の問題が出て参ります。ですから皆さん、今回研修されたことがきっと役に立つ時期がやって来るんだろうというふうに思っています。更にこれに加えて、へき地の場合は歴史的な過程も色々関わってきますから、更に複雑な状況になるだろう。法律的に言えば、へき地教育振興法、皆さん聞いたことあると思うんですが、もう1つ離島開発振興法っていうのがあります。それから既に終わっているものですが、同和対策事業、これは30年近くでしょうか、時限立法として行われてきた、大変な予算が付いた事業です。更に、過疎化対策事業っていうのも行われています。こういうものが全部入り組んだ問題として今日、色々なテーマで発表されたものも行われてきているんだろう、そういう問題が広がっているんだろうというふうに思っています。

これから短い時間の中で、短くコメントをさせて頂きたいと思うんですが、そのときに、ごめんなさい、私褒めるだけの教育って大嫌いなものですから、褒め殺して大嫌いなんですよ。それでもしかすると、ちょっと耳に痛いところがあるかもしれないですが、あえて言わせて頂きたいのは、今回皆さんが報告されたのは、ご自身の中でもちょっと特異な体験をした、非常に特殊な体験をして良かったっていう思いを持ってらっしゃると思うんですが、それであるが故に、特殊視をしがちだということなんです。これ私の体験からです。具体的に申しますと、私は自分のことしか言えないので、20年程の教員経験の中で国立学校2校です、公立学校4校です、私立1校、それを経験したんです

が、同時期に複数の学校を持てたという経験があります。比較が出来たということなんですね。その中で東京と北海道の違いだとか、それから中規模校以上の学校に勤務していました。1500人超える中学校にいたこともあります。非常に特殊な事例です。ところが、そういうところにいると全部特殊な事例として言いたくなるんですが、結局全部違うんですよ学校。100校あったら、100校違う学校があると思った方がいい。ですから今回せっかく貴重な体験をされたときに、私の体験だ、私の体験だって言いたくなると思うんですが、他のところにも一杯色んな体験ありますからね、自分の経験したのはごく一部だという前提で、広く捉えて頂ければ、今日来た皆さんの場合は、より有効に自分の知識に生かして頂けるんじゃないかと期待しております。

特に今村真弓さんがプリントの中でお書きになっているんですが、1つのカテゴリーで括ってしまうことの危険性。だから、へき地ってこういう学校だって言いたくなるんですが、それは違うよということですね。100があったら100がある。ですから、午前中に色々な学校の経験を聞かれたと思うので、こういう言い方良くするんですね。あなたの学校ではそうかもしれないけど、私の学校では、て言い方をする場合が多いんですが、それおかしいんですね。あなたの学校ではこうですか、私の学校はこうですよ、じゃあ他のところはどうでしょうねっていう発想でいた方がいいだろうと私は思っているんで、是非皆さんの場合は参考に出来る方々ばかりだと思いますから、有効に利用して頂ければなというふうに思います。

特に、へき地の1番の辛さを皆さんは経験しておりません。午前中の発表で利尻富士町の事例のときに一言、ご発表がありましたけども、へき地の本当の大変さは季節と天候の問題ですよ。そのことによってどれだけ酷い環境におかれることがあるか、ということまでは皆さん経験されていませんよね、そこで生まれ育った方は経験があるかもしれないませんが、ということも含めて、自分の知らないことがまだたくさんあるっていう前提で、きっと捉えて頂ければよろしいんじゃないかと思えます。

それぞれのコメントをさせて頂きたいと思うんですが、まず1つ目は大阪教育大学の学生さん達、2年生の方々が発表されて、これは専門性の問題が1つあると思いますので、この先更に学習を深めて頂くんだらうと思うんですが、大阪教育大の皆さんに、是非、今日情報交換会に出られる方もいると思うので、大阪教育大学の地理的な状況、それを北海道教育大学の学生に分かるように説明出来ますか、ということです。山の上であり、エスカレーターを乗り継いでいくという、あの形を見たことない人間にどうやって伝えるか。その説明の仕方のところをこういう発表のところを生かして頂ければ、より分かりやすくなるだろうなというふうに思っています。何が言いたいかといいますと、日本の教員は免許主義です。ですから分かりやすく言うと、日本の教員は、教科の指導力に対しての免許が出されている。特に中学校、高校はそういう傾向が強いです。と

いうことは、こういう報告のときに是非、小学校であっても教科の指導であるとか、学習指導面、それからカリキュラムについて、ちょっとでもいいから触れて頂けると、よりの確な説明になるんじゃないかなというふうに思います。その点でちょっと、私は読んでいて面白かったんですが、知りたいなと思う部分がありました。それから、島に行かれていますので防災の教育。特に東海沖の地震の問題がありますよね。ですから島に行ったときに、防災関係のところはどうなのかという、感覚でものを見るとか、ということもあればより深みのある報告を頂けたんじゃないかなというふうに思っています。これは利尻の場合も同じだろうと思います。

同和の方について言いますと、人権推進校であるというようなお話がかかれていますから、それも大事なことだと思います。ただ同時に、教員が職務を遂行する上での政治的な中立の問題、これと政治事象との兼ね合いがどうしても出てきてしまうので、皆さんがこういう経験を元にしなから教員になったときに、そこはどういうふうに考えた方がいいのかということも是非、書く必要はないですが、お考え頂ければなというふうに思います。

それと小林さんの発表は、発表を聞いていて良く分かったんですが、5ページ目のところの、先生として、お兄さんとして接するというフレーズの説明のところがありました。その通りだと思います。ただ、あなたが教員を続けていかれるときに、やがて先生であり、親であり、おじさんである時期がやってきました。やがて先生であり、おじいちゃんであるっていう時期もやってくる。そこをどうやって切り替えていけばいいのか、というところをどういうふうに考えた方がいいのかなと、ずっと私のテーマでもあったんですが、是非、考えていって頂ければなというふうに思っています。合わせて、小林さんの発表と石川さんの発表、非常に似ている部分があるんですが、スクールボランティアとかサポーター、これヘルパーと、どこ違うんだっていうところに、非常に気になっています。その話に行く前に、鯉坂さんのご発表がありまして、実はこの2つはプリントを見たけど、なかなか結び付かないでおりました。ただ発表の中で一本筋が通ったなというのが、表現者として自己肯定感、自尊感情といってもいいんでしょうか、というところで一本筋を通すっていうのが、ああ、なるほどなことで、これ大変良く分かりました。願わくば、ベネズエラとアメリカは仲悪くはずですし、フィリピンの教育はアメリカの影響を受けていると思うんですが、何故フィリピンでベネズエラのやつをそんなに簡単に入れられたのかなってところに、もし説明があれば、私としてはより分かりやすかったなというふうに思っています。

石川さんからは院生さんですので、非常に2人も細かく分かりやすい説明で、私は大変勉強になりましたが、石川さんの方で言いますと、この色々書かれている部分ですね、これ免許所持者であり、教育実習修了者であるという形での学校側の対応だったんだらうと思うんですけども、な

んかヘルパーに見えちゃうんですね。ですから、採点業務を代行させられているかのように感じてしまっていました、私自身は。これって先生の手抜きじゃないのっていうのが、正直な感想です。だから小林さんのところでもそうなんです、教員がそれをやりながら、サポートと一緒にやるといなら分かるんですが、サポーターだとかボランティアの人に、丸投げをしているかのような感じを受けてしまったので、それはちょっと違うんじゃないのかなって。皆さんへの不満ではありません。ただそういう状況があるなら、これはあんまりいい話ではないなという、個人的な感想を私は持っております。

最後に、院生で今村さんの説明の中で、外国人の生徒さんの話が出ておりました。これは非常に貴重な事例だと思うんですが、同時に外国人だからサポーターが手厚い、日本人であったんならどうだろう。特に全く違う文化背景のところから来た生徒さん、転校生の場合に、どこで日本人の教室でサポートしようとしているだろうかというところを反省もさせられました。同じようにとっても大事な問題なんです、例えば給食とか宗教の問題、これ既に起きていますが、この給食、宗教への対応であるとか、その子のアイデンティティーをどうやって伸ばすのか、日本人として伸ばすわけではないだろう。じゃあ、どういう形でそのアイデンティティーを育成させればいいのかっていうときに、保護者の方のニーズと学校が出来るシーズ、ニーズとシーズの問題、これどうやってクリアしたらいいんだろうかということも考えながら、現実に横浜、神奈川だと思うんですが、公立小学校で日本人の方が少ない学校がある。その場合に義務教育小学校、日本の、日本の憲法に基づいてその主旨だけでやればいいのかい、でも日本の学校だよねっていうジレンマが多分生じてきます。そういう問題を考える上でもこの1つの事例報告っていうのは、とっても重要な意味を持っていたんだろうなというふうに思いました。

全般として短い時間で雑な説明をさせて頂いたので、もしかすると本意じゃない言われ方をしてしまった方もいるかもしれませんが、非常に私自身は個人の意見ですけども、知的に興奮をさせてもらいまして、大変楽しかったです。是非今回皆さんやって頂いて緊張もされたと思うんですが、とにかく楽しかったんじゃないかと思うので、是非この楽しさを続けて頂ければと思います。ごめんなさい、5分オーバーしてしまいましたけど、私の方は以上で終わらせて頂きます。最後に、言い返す時間与えないでごめんなさい。一方的な言い方で言い逃げになっちゃうんですが、もし不満でしたらその辺で捕まえて、論争をふっかけて下さい。どうもありがとうございます。

#### 報告Ⅱ 司会：西村

以上をもちまして、プログラム報告Ⅱ HATO連携大学による報告を終わらせて頂きます。

#### 研究協議司会：廣田

それではこれから研究協議を始めたいと思います。司会には私センター員で、釧路校のへき地教育実習委員会の委員長を務めております、廣田が行わせて頂きます。

この協議は多様な教育実習導入の意義と教員養成の質保証ということで、今回のフォーラムで発表されました様々な実習の成果と課題について、議論をしていきたいと思っております。それをやるにあたって、まず始めに北海道教育大学へき地教育支援部門主任センター員の川前あゆみから、基調報告をさせて頂こうと思っております。それではよろしくお願い致します。

#### 研究協議

##### 〔基調提案〕

#### 川前あゆみ（北海道教育大学 へき地教育研究支援部門 釧路校主任センター員）

川前です。よろしくお願い致します。時間が押していますので、かいつまんで説明させて頂きます。多様な教育実習の導入の意義と教員養成の質保証ということで、主には、北海道教育大学のへき地校体験実習の取り組みを中心にご紹介させて頂きます。プレゼン資料はお配りしていませんので、スクリーンの方を見て頂ければと思います。

今年度、北海道教育大学札幌、旭川、釧路校で、実習生123名が参加させて頂きました。実習協力校については、25の市町村で54校にご協力頂いております。なんとか無事に今年度、事故なく終えることが出来ました。北海道の教員養成におけるへき地実習の必要性というところでは、先程の阿部先生の講評にもございましたけれども、北海道の地域的なへき地校の部分については、偏りが大きいということで、全体的に見ると、札幌圏、或いは地方都市を除けば、ほとんど全ての市町村の学校が、へき地校指定を受けているのが実際です。そういったことを考えたときに、北海道教育大学を卒業した卒業生達が、道内で教員として勤める場合には、多くの教員がへき地小規模校に勤務する可能性が高くあります。これが実際です。そのために教員養成段階において、このへき地校体験実習を充実させていくことが大事ではないかということで、毎年130名前後、実習に参加させて頂いております。かなり年月が経っておりますので、実際には実習校の先生方が、かつての実習生だったりもしています。そういった中で、かつての実習生が今度は受け入れ側の教員として、現在の学生の受け入れをして頂いているというようなことも多々散見されるようになりました。

この実習の目的については大きく幾つかあるわけですが、1つ目にはへき地小規模校の授業方法ですとか、生徒指導法の習得が第一にあります。2つ目には、今日の午前中の8校の発表にもありましたけれども、実際に地域に移り住んで1週間、或いは2週間にへき地小規模校が実際に存在する地域での地域理解に努める実習であることです。3つ目には、学校教育における地域連携や融合のあり

方の観察、或いは実際に体験しながらの理解となります。こうしたへき地小規模校実習の目的というのが、学生の力量を上げるだけではなくて、少人数指導や地域理解、地域と学校との連携のあり方、関係性については、都市部の学校においても必要とされる力量だということで、必ずしもへき地小規模校だけに有効性があるということではないです。

午前中の各発表の中にもございましたけれども、北海道教育大学の中では、2年生に最近取った、事後アンケートの中で、上位2つだけ紹介すると、2年生では少人数複式授業の良さや難しさを体験したこと、或いは子どもとの触れ合いや関わり方を体感したことといったように、実際に小規模校で1週間過ごしてみて、子どもとの距離感が、ある意味縮まったということが大きな成果として挙げられています。2番目のセッションで発表してくれた3年生や4年生は、複式授業や少人数指導の工夫だとか、少人数の学級経営の工夫です。学校の周辺には図書館が近くにはありませんので、読書環境をどういうふうに工夫するか、或いはコミュニケーション力を高める工夫だとか、社会性を身に付けるための工夫がありました。今日の報告では、1週間或いは2週間地域で過ごす中で、保護者や地域の人達との実際の大切さ、関わり方を知る機会になっているということが、学生の学びの中から挙げられております。

トータルに見たときには、小規模性や地域性を生かした特性というものが、北海道教育大学で実施している、このへき地校体験実習での1つの成果でもあり、今現在行っている小規模校での特性として、10点ほど挙げております。1つ2つ取り上げてみると、①が上の方にありますが、教師と子どもとの信頼関係を形成しやすいという、小規模校の特性があったり、異年齢、異世代との関係を作りやすいという地域性もございます。また、発表にもたくさん出てきましたが、子どもの到達点に応じた学習指導や生活指導をしやすいということも挙げられております。4番目の子ども同士の協同活動だとか、グループワークというのは、少人数だからこそ色々やり難さとか、やり易さを見出さなきゃいけないというような、指導方法の工夫も新たに特性として挙げておりますが、そういったことも含めて実習生の皆さんが今日の発表にもありましたように、様々な指導の工夫を現場の先生方と一緒に考えて、授業案や授業観察に臨んでおりました。

よく耳にするのは、教育の原点がへき地の教育にあるということです。色々な言われ方をしているんですけども、この教育の原点というのが、信頼関係を基盤にした指導であったり、個々の状況に応じた指導であるということは、今日の発表の中で認識出来たかなというふうにも思います。また、午後の発表にもありましたが、1人1人の気持ちだとか、発達段階だとか、学習到達点を大事にしているということも、多様な実習という意味合いの中で感じられたかなというふうにも思っています。

今日この後の協議の中では、午前中のへき地校体験実習

から捉える教育の原点、つまり小規模校での実習を通して、教育の原点に気付いていく体験実習のあり方です。2つ目には、北教大も含めて、愛知教育大、大阪教育大学、東京学芸大学の多様な教育実習を導入することの意義について、多様な実習を経験することで、学校を総体化して捉えていく力を実習生の皆さん、今日発表の皆さんが獲得していったということも、私達の教員の方で感じ取ることが出来たかと思えます。3番目はこの後の協議のところでの話題にしていきたいと思うんですが、そういった中で教員養成の、たまたま4大学、今日連携大学として皆さん、ご参集頂いていますけれど、教員養成の質保証というものを考えたときに、今日の午前、午後の学生発表にあった多様な教育実習を導入することが、どんな意味をもつのかな、アクティブラーニングというの、実際にはこの実習生達の報告にもあったように、自分達で課題を見つける実習になっていたり、自分の成果を見つける実習になったりと、様々な報告がございました。そういった中でこの後の協議、皆さんから色々な意見を頂きながら、HATOプロジェクトが来年度、最終年度を迎えますけれども、来年度の課題と今年度までの様々な教員養成大学の取り組みとしての実習のあり方ということで、議論を頂きたいと思えます。よろしくお願い致します。

#### 研究協議司会：廣田

これから連携4大学についてご発言頂くんですが、その前に簡単にお名前を紹介させていただきます。愛知教育大学からは中妻雅彦先生、東京学芸大学からは鉄矢悦朗先生、そして大阪教育大学からは馬野範雄先生でございます。

それでは、先程、色々発表がございましたが、それぞれの実習の目的、成果、意義についてお話を頂きたいと思えます。中妻先生よろしくお願い致します。



〔研究協議〕

#### 〔話題提供者〕

中妻 雅彦 氏 愛知教育大学 (HATO連携大学)

愛知教育大学の中妻です。他の大学の先生と違っていて、教職大学院と修士レベルの実習ということでお話したいと思えます。先程の講評の中で、阿部先生がお話になって下さったことは、実は本学の教員の中でもずっと話題になっていることです。長期的な実習、学校サポーターと言いま

すが、それと集中的な実習をどういうふうに兼ね合わせるのか、或いは、長期的な実習を学校サポーターの場合、学校任せになって、担任の先生の補助的な役割しか果たしていないのではないかと、学びがないんじゃないかということが、本学でもずっと言われていました。これに対して教職大学院のポートフォリオの中に、「実践的指導力のガイドライン」があるのですが、これを数値化して指標を見ることが出来るようになっております。これを3年分まとめて報告して、本年度の大学研究報告に掲載しました。3年分の学生の集約をすると、学校サポーター、教師力向上実習、それぞれ、先程も石川さんの報告にもありましたけれども、学校サポーター活動では、長期的に学校を見る目が、教師力向上実習では、教科指導と生徒指導を集中的に実践出来るという、両方の良さの中で自分の実践的な指導力を身に付けているということが、学生の中の数値の中でも明確に出て来ております。そういう意味では、本学で言っている長期的な学校サポーター、集中的な教師力向上実習は、これを継続していくということが大事なんだと、研究報告で書かせて頂いています。

それからもう1点ですけど、学生の学びということに関しまして、実は、へき地小規模校プロジェクトに入らせて頂いて学んだことで、来年度より、教職大学院では地域を限定しまして、そこで学生の地域研究を継続しながら、最終的には教科、或いは領域の指導計画を作って、授業プランを作るという授業を立ち上げることにしました。これは、本学がへき地小規模という形での実習をするというわけではありませんが、学生が能動的に学んでいくという授業科目が必要だろうということで、設置することになった科目です。来年度立ち上げということで、実際どう進むかわからないんですが、このへき地プロジェクトの成果の中から私達の大学が学んだことと、現在考えております。

#### 研究協議司会：廣田

ありがとうございます。それでは続きまして、鉄矢先生よろしくお願い致します。

#### 【話題提供者】

#### 鉄矢 悦朗 氏 東京学芸大学（HATO連携大学）

こんにちは。学芸大でデザインを教えている鉄矢と申します。質保証とアクティブラーニングということで、川前先生からお題を頂いております。今日午前中からずっと発表を見てまして、我々は一体何を目標にしているんだろうっていうところをもう1回自分で考えて、自分の言葉で解き直すと、多様な成長と多様な未来というのを何とか作ってあげられる教員養成にならなきゃいけないだろうと思っています。このようなことを考えた背景には、私自身が今HATOの別のプロジェクトで教育環境支援ということで、墨田区の方の学校に学生ボランティアを出していることや、学生に島実習をすすめたり、毎年地方の小さな小学校に、出前授業に行き、学生達に地域の現場を見せていたりした

ことがあります。

私は元々建築設計が専門なんですけれども、水辺が側にある敷地、景色がいい所にある敷地には多分、窓の広がりビングを作るんだと思うんです。それから斜めの土地には何をするかとか、敷地が個性的であれば個性的であるほど、実は建てる者は楽しくなってきます。今我々は上手くそういう土地の条件などを理解して設計が出来ない学生達に対して、そういう与条件が分かりやすい場所を、与えようとしているような気がします。条件が明確なところ、小規模であるとか、へき地であるとか、それから島であるとか、家庭環境が難しい地域になっているところなどにわざと学生達を入れる。そうすることによって、学生達がそういう与条件を自分達でどう見て、どうやって教育をデザインするんだっていうところに取り組んでいるような気がするんです。こういう体験をすると、大都市という漠然とした場所、郊外と言われる個性が掴めない場所にあっても、その中で個性が拾え教育をデザインできる教員になると思うのです。先程言った多様な成長、多様な未来というのは、こういう教員でないと作れないような気がするんです。建築と重ねながら、自分なりに解釈をしようとするところが私の癖なんです。教育をデザインするんだっていう先生方をどういうふうに育成するかっていうのは、実はやっぱり地域が鍵になっていると思います。デザインの与条件になる地域、それから家庭、それから本人、それからそこに関わる教育デザイナーである教員ってというのが関わって、初めて物が生まれてきたり、発生するんだろうなというふうに今日は考えさせて頂きました。

#### 研究協議司会：廣田

ありがとうございます。それでは続きまして、大阪教育大学から馬野先生、よろしくお願い致します。

#### 【話題提供者】

#### 馬野 範雄 氏 大阪教育大学（HATO連携大学）

大阪教育大学の馬野です。今日は先程阿部先生が、楽しまれたでしょうと言われたときは、うんと思わず頷いていたのですけれども、あつという間の時間だったです。改めて自分としては、今回のテーマと今日の発表内容を聞きながら、3点は賢くなったかなというふうに思っています。

まず1点目は多様性ということで、色んな実習で学生達が多様な経験しているということです。1回生から4回生まで本学でも色んな実習の形態を作っていますが、どの回生ではどんな形態で、時期はいつ頃、期間は2週間あり3週間あり、或いは週に1回か2回か、期間は半年か1年間かというように、大学としての教員養成のカリキュラムが非常に多様化してきて、学生達に選択の機会が増えていることです。このように多様な教育実習として、形は出来てきているかな、器は出来ているかなという印象を受けました。

2点目はカリキュラムと同じになります、実習の多様性

ということです。今回特に、私たちの言葉で言えば遠隔地実習にあたります。学生達はこの遠隔地、或いは小規模校実習で、どんなことを学んでいるのかなと考えてみました。本学の場合は2回生で行きますけども、1つは教師、教職ってどんなことをしているのかなという教職理解です。2つ目には児童、生徒と言うけども、どんな子ども達がどんな思いや願いで、或いは何が得意で何が不得意で、何に興味を持って、興味を無くして、生活をしているのかなという、多様な子ども達と関わることで、児童理解を深めるということがあります。それから3つ目は、多様な地域があると思います。本学の遠隔地実習としては3校ですけれども、基本的には体験実習という形で、大阪教育大学の近隣8市の協力校で色んな実習をしています。遠隔地実習には、さらにもう1つ、子ども達や地域の理解と同時に、学生同士が共同生活をする、協働性というか、同僚性というか、そういう人間関係作りにも魅力があるなと思っています。

今回紹介させてもらった遠隔地実習は、三重県の学校があり、長野県があり、愛知県のある学校があるという、多様な学校、多様な地域、多様な先生方や子ども達との関わりがあります。この多様性という観点から、3大学とも工夫して、行っているんじゃないかなと感じています。

3つ目は、振り返り、リフレクションということです。やりっぱなしで終わっていたら、せっかくの経験が不十分な、要するに熟成しないままで終わっちゃうんじゃないかなと思います。朝、北海道教育大学の学生達の発表を聞きながら、学部生、大学院生の話も出る中で、改めて交流会と言うか、成果と課題を交換し合っていく中で、自分達の学びが自分達の学びだけで終わるのではなくて、それぞれの違う学びがあり、視野が広がっていくとか、自分の中でまだまだ不十分な点が意識出来るとかいう魅力を、改めて感じる事が出来ました。今日参加してくれた本学の2回生も勿論そうだし、今日参加してくれた他大学の学生さんもそうだと思いますが、今後に向けて、改めて自分の課題を意識されたんじゃないかなと思います。今後もう1歩自分がステップアップするには、もっとここに焦点を当てる必要があるんじゃないかなとか、ここが不十分なところだという、自分の課題が焦点化・明確化されたんじゃないかなと思います。そういうことを踏まえて、これからもう1歩前進するために、具体的な方策をボランティア活動でいくのか、或いは発展、或いは教職大学院、そういうところの実習に参加していくのか、色んな方策の中で、改めて自分の進むべき課題と方策、在り方といったものを考える場になったんじゃないかなと思っています。これからはそういう交流や省察の場の構成を、大学としてもっと工夫していくことが課題かなと思っています。以上です。

#### 研究協議司会：廣田

ありがとうございました。今4大学の方から意見等を出しましたが、この研究協議を全体で取り組んできたいと思っています。時間がちょっと短いので、お1人様の発表を2、

3分ということにして頂きたいんですけども、会場の方から今日のような発表を見た中で、感じられたこと、或いは様々な課題、こういうものがございましたら、ご意見として挙げて頂きたいんですが、よろしくお願い致します。

#### 今 尚之（北海道教育大学 札幌校）

北海道教育大学におります、今でございます。今の各先生方からのご提言を伺いまして、本当に大切なポイントだと思う中で、鉄矢先生がおっしゃって下さった、教育とデザイナーとしての教員って言葉が凄く胸に響きました。この言葉をじゃあ自分が北海道教育大学の中でどう実践していくのかって、これから考え続けたいと改めて思いました。ありがとうございます。今日のお話の中で、やっぱり地域連携とか地域理解という言葉。地域という言葉が繰り返し、繰り返しあったと思うのですが、そうしたときに、私は教材としての地域と同時に、子どもを支える、学校を支える地域という部分をどう学生さん達が知っていくのか、それを得ていくのか。または、我々はそこにどう関わっていくのかっていうのは、凄く大きい課題じゃないかなと思いました。そういう意味でやはり、教育の自治というか、その地域がどう自分達の地域の中で子どもを育てたい、そういうことを考えてる視点をどれだけ学生さん達が得てくるかっていうのは、大きい課題だと思って聞かせて頂きました。

合わせて先程、多様な環境条件の明確化っていうお話が、先生方からありましたけれども、そこの中で私、地域が育とうとしている大人達がいる地域というところ、自分達自身も常に育っていきながら、地域を良くしようと思っている大人達が、まさに地域の中で学んでいる、社会教育って言うていいかと思うんですが、そういう地域があればそこに入っていった学生さん達は、多くのものを身に付けてくるとは思わないのかなと同時に、私達自身も地域に関わっていかない限り、いい実習、そして質保証に繋がる実習、ボランティア活動先は出てこないんじゃないかなと。そういうようなことを今日の学生さん達の発表もそうです、先生方の提言から感じまして、私達自身の地域の関わり方、そういったものも含めて、また社会教育と学校教育というものの関係性を今回このフォーラムの中から私自身課題とさせて頂きたいなと思ったところでもあります。ちょっと感想めいて申し訳ございません。

#### 研究協議司会：廣田

ありがとうございます。他に何かご意見ございませんでしょうか。はい、どうぞ。

#### 越川 茂樹（北海道教育大学 釧路校）

北海道教育大学の釧路校の越川です。先生方、ありがとうございました。今の地域ということについてなんですけども、北海道を考えたときに統廃合の問題があって、学校の地域というんですけれども、子ども達にとってみたら、



その本当に通える範囲の子ども達と、それから通えなくてスクールバスであるとか、親が送り迎えをして来るといったような形で、実は地域と単純に申しまして、その地域自体が違っている、子ども達の本当に身近な地域がその学校にないっていう状況も生まれているわけです。そういったことも今後考えていく必要があるんじゃないかっていうことを常々思っていて、その辺り皆さんどうお考えなのかなってというのが、ちょっと話が出来ればなっていうふうに思っています。以上です。

#### 研究協議司会：廣田

ありがとうございます。実は私も、司会であまり話は出来ないんですけども、10年ぐらい前にこちらに参りまして、それまでは東京におりました。こちらに来たとき一番驚いたのが、学校が地域づくりの中心になっているっていうことを物凄く実感したということと、今統廃合の話で言いますと、実は統廃合というのは、都市の中では1つのエピソードなんです。学校が無くなってしまふということはあるけども、地域自体が無くなることはないんですけど、この北海道の中で考えてみますと、実は学校というのは、その地域を支えた最後の公共施設であって、人が集まる場所であるわけなんです。ですので、実はその学校の在り方が地域を決めているというところがあって、それ故に地域の人達は学校への期待も大きいのではないかな、なんてことを思ったりしています。

他に何か、勿論地域のことで続けて頂いても結構ですが、

#### 玉井 康之（北海道教育大学 釧路校）

北海道教育大学釧路校の玉井と申します。今日はもう本当に大都市からこのへき地に興味を持って参加して頂いたっていうのは、本当に私は有り難いと思います。今の地域の関係で言うと、その地域を知っているのはそれぞれの先生、中妻先生、地域を調べる、鉄矢先生も困難なことも含めてその地域の個性を知ると。多様な課題を学校から発見すると。これ本当に私共もその通りだと思います。その上で、先程、阿部先生がその地域の困難を知らないって話をしたんですが、その地域の中に入って生活をするっていうのは、結構へき地の場合は大変です。その生活の大変さっていうことを含めて、これをどういうふうに教えるかって。この辺もちょっと、これからの我々の課題だと。現実へき地には、やっぱり行きたがらない。経験して楽しいな、そこで勉強になったな、でもへき地には行きたがらない。これが現実、これをどうするかっていうのが1つの課題です。

それからどの大学も主免実習を含めて、教員養成の大きな目標があると思います。こういう多様な実習っていうことを今度主免実習や教員のトータルの質のところはどう持っていくか。そのためには我々がそのところにある程度、大学が位置付けをして、そのところに認識をさせる何か我々のバイアスがなくて。経験は確かに広がるのは凄く大

事なんですけども。これ実は先生方の質問っていうか、私自身もそのことをどうするかって、常に考えざるを得ない。そういうつもりでご質問させていただきました。以上です。

#### 研究協議司会：廣田

ご意見、ご交流、続けたいと思うんですが、何かございますか。はい、では、そちらどうぞ。

#### 二宮 信一（北海道教育大学 釧路校）

釧路校の二宮と申します。今日は4つの大学の学生さんの話を聞いていて、1番感じたのは、学生自身の原体験をどうやって振り返らせるのかっていう場をどういうふうにするのかって。大学で色んな講義をしたり、色んな体験させたとしても、多分、学生が18年間生活してきたその原体験からそれを理解して、加工していくんだろうと思うんです。最終的にその加工したものを持って現場に行くっていうことを考えると、学生自身の原体験、教育の原体験をどう振り返らせるか。これを大学の中でどういうふうに位置付けていくかっていうことが、多分大学4年間の学びの幅をある程度決めていくような気がしまして、そういう意味では、原体験を学生1人1人がどちらかという、変な表現ですけど、あまり自分と向き合ってきてない学生が感じることがある。そうなる自分と向き合ったりしていくっていう経験をやはり一度通っていかないと、知識だけを溜めて、体験したとしても、やはり知識だけで終わってしまうような気がして、その辺の振り返りをどのように考えるかっていうところを少し議論させて頂ければと思っていました。

#### 研究協議司会：廣田

はい、そういうご意見出ております。何かございますか。学生の方の中でせつかく受けてきた中で、どういうことを学んだかということをよくしければ少し話して頂きたい。或いは受けただけ、こういうところがもっとあった方が良かったんじゃないか、こんな意見ございましたら、よろしくお願ひしたいんですけども。誰かいませんか。

#### 川端

北海道教育大学釧路校4年目の川端と言います。私もへき地実習に2回行って、主免実習行って、中学校に実習行って、特別支援で高校に行ってって、なんか物凄く実習に行つて。こうやってたくさんの学校に多様に実習に行くことによって、色んな子どもとか、色んな先生と出会うことで、自分の考えと合う先生とか、こうなりたいと思う先生とか、そういう人の出会いがあって。色んな地域に行くことで、この地域は学校にこういうふうに関わっている、例えば行事に積極的に参加していたり、指導しに来てくれたりです。でも指導しに来ているところは見なくても、学校行事にはたくさん来てくれる地域があったり、自分の中の学校という存在とか、地域という存在を深めることに繋がっ

たので、多様な教育実習っていうのは、私は意義がある活動だと思っていました。そして、私の研究室では色々な地域に行きボランティアをする中で、やっぱり学校とは違う地域性っていうのもたくさん学んできたので、色んなところに出向くことの大切さもあるなって、私は今日を見て、更に感じました。以上です。

#### 研究協議司会：廣田

はい、ありがとうございます。他に何かご意見ございますか。学生の皆さんでも結構です。なんか、釧路、北海道に偏っておりますが、そうじゃなくても結構です。何か感じたこと、表現してみましょう。学生でなくても、勿論構いません。はい、どうぞ。

#### 小林

東京学芸大学の小林です。先程の二宮先生の学生の学びの原体験をどう振り返るかっていうところなんですけど、本当に原体験になっているか、それともコーティングされた体験になっているか、そこまでは踏み込めないんですけど、僕が実際に経験したこととしては、先程紹介した、例えば何か教材を作るときとか、子どもがぶち当たっている困難に対して、例えば数学の困難に対して、美術科とか国語科とか違う学科の人達がそれに対しての問題への解決を考えると、皆頑張って大学で学んだこととかを必死に雑多に引き出して、話をするんです。全然まとまってないんですけど、ある意味それって、原体験をとにかく振り返っていて。そういう場があると、例えば1つの課題に対して、学生が皆でそれを解決するみたいな場があると、必然的にそこには大学で学んだことが、もう一度戻ってくるのかなっていうふうなのは、お話を伺っていて思いました。以上です。

#### 研究協議司会：廣田

はい、ありがとうございます。実はこういう時になってくると、時間がだんだん少なくなってきてまして、これ本当は伸ばしたいんですが、後が詰まっております。というわけで、あと1人か2人なんですけれども、何かございませうでしょうか。この際ということがございましたら、はい、どうぞ。

#### 鯨坂

東京学芸大学4年の鯨坂です。話が重複してしまうところもあると思うんですが、東京学芸大学でのへき地実習というのが、今年は4人しか行けませんでした。その中でこういうフォーラムがあることによって、他の他大との交流が出来たりですとか、私は音楽科で国語科とはあまり関わりがなかったので、そういう少数の場で色々な意見を交わして、そこから新しいことが発見出来たり、発見出来なくてもやもやしたり、違う角度から考えられる機会を手に入れられたっていうこと自体に関して、私は凄く満足してい

ます。なんですけれども、4人しかいないのでチャンスがなかなかないっていうのも、新しく感じる事が出来ました。なので、東京学芸大学としてはもうちょっとこの機会をオープンにしていって欲しいなと思います。以上です。

#### 研究協議司会：廣田

はい、ありがとうございます。学生の方からたくさん要望や、思いがあると思います。私も色々発表を聞いて、学びっていうのは、学ぶ内容も大切なんですけど、今お話があった方からあったように、エルシステムですか、学び方っていうのも子ども達や、1人1人の大きな勇気や力を与えていくんだなってこともちょっと考えました。と言う言い方をしたというところで分かると思うのですが、もうそろそろ時間が終わりになってきております。今度は今さっき発表した順とは逆に、大阪教育大学の方から一言ずつ、まとめを兼ねて発言をお願いしたいと思います。それでは馬野先生、よろしくお願い致します。

#### 馬野

ちょっと意表を付かれまして、慌てましたけども、私の方から2つ述べたいと思います。

1つは、地域の捉え方っていうのは、小学校の社会科の授業もそうですけど、校区の地域という言い方をしたり、それが市町村レベルだったり、都道府県レベルだったり、場合によっては日本全体を地域的な取り上げ方をしたりとかいろいろです。私は柔軟でいいんじゃないかなと思っています。本学の学生が、その地域の学校で実習をさせてもらって、その2週間はその中でどっぷりと浸かって、地域の住民とか先生とか、子ども達と一体になって活動しています。

学生たちは、大阪に帰って来て大阪の学校で就職するかもしれないし、地元へ帰って、神戸とか京都とかで先生になっていくかもしれない。それぞれのところで自分の地域意識を持って、活躍してくれたら、遠隔地・小規模校実習の成果として、評価できるのではないかと思います。

もう1点は、自分と向き合うという場になっていると思います。大学生でも、「実習行って楽しかったです、また行きたいです」というように、小学校の低学年の生活科みたいな感想を言ってくる学生も中にはいます。その学生達が何を学んで、何が自分の今後の課題なのかというのは、やっぱり他の人との交流の中で感じるものではないかと思えます。勿論、その実習期間中に指導教員から言われたこともあると思いますが、学生達は違う経験、違う学校、違う先生から色々なアドバイスを受けた経験や学びを聞くことによって、「そんなことを自分は言われてないわ」とか、「そういうことを考えたこともなかったな」といったことに気付く場が大切だと思います。ただ単に成果と課題を話し合うだけではなく、「そういうことでいけるのか」或いはもうちょっと突っ込んで、「今後あなた達は何をするのか」というような場を作る事が大切だと思います。何よりも、実

習へ行って自分は何を感じてきたのかっていうことをしっかり持ってないと、その場ではあまり話せない学生になっているかもしれない。そういう意味では今、1つは交流の場をどう充実させるかということ、もう1つは、教育実習をただ単に実習の記録を書くというレベルの実習ノートじゃなくて、その中で何を学んだか、何に気が付けたかというような、中身にもっと踏み込めるような実習ノートを記録させるようなシステムを作りたいいなと、こんなふう感じているところです。以上です。

#### 研究協議司会：廣田

ありがとうございます。それでは東京学芸大学の鉄矢先生、お願いします。

#### 鉄矢

先程うちの鰯坂さんから話があったように、鰯坂さんは音楽科教育で僕は美術の方で、小林くんは国語科で、全く違うのが3人がここにくるまでずっと喋り続け3人が理解をして、この場に出るためにはどうしたらいいかを工夫していました。さきほどとかぶりますけども、与条件、与えられた条件、この場を与えられた、この場を最高に使うためにはどうしたらいいかを考えておりました。学芸大、島実習やってる。HATOのもう1つのプロジェクトとか、そういうものを全て与条件として持ち出して、その中で最大限の工夫をどこに出来るのかっていう工夫をする隙を見つけるって、凄く大事だと思うんですね。多様な実習が出来るためには、色んな個性のある地域であったり、親であったり、本人もそうでしょうし、学校であったり、同僚であったりというすべてを与条件として全部受け止めて、その中からいいものとか、工夫出来るものを見付けられることをしていくんだろうと思うんですね。工夫する隙間を見つける視点さえあれば、具体手段を企画出来るんだと思うんです。それから、先程色々な役割分担って話もありましたけども、実践する行動力を1人じゃなくて、どうやって共有して、具体化して、実践するかっていうのに繋がっていく。それを教員養成の中では、どこまでやるのがか問題だと思います。教員養成で具体的実践力まですべてつけるとは、私は無茶だと思っています。なので今は実習の中では隙間を見付けて、具体的手段を試して失敗してっていう段階でいいんだと思います。そういう中で教員になったとき、どんな学校に行っても、その中で貪欲に個性を見付けられて、この個性を生かせる、どうにか出来るとか、良く見れば学校出れば誰かに会えたとか。そういう意味でネタをちゃんと探せる教員になってくためのフットワークを鍛えてほしい。フットワークが良くなるためのアクティブトレーニングが出来れば良いと思っています。

#### 研究協議司会：廣田

ありがとうございます。では、愛知教育大学、中妻先生、よろしくをお願いします。

#### 中妻

先程、統廃合の問題が出ましたけれど、僕の知り合いに、小中高と全部東京の学校が無くなっちゃった学生がいます。もう今、大学院生ですけど。僕は北海道へ来て、この研究に仲間に入れてもらい、今年度は三重県のへき地複式教育研究会の研究指定校でお話もしました。地域が学校を支えているとか、学校が地域を支えているってことを言うんですけど、北海道や三重なんかでははっきりしているのは、学校が、産業に関わっています。農業とか漁業とか。僕は、この強さを、何処かで生かさなきゃいけない。東京のある地域でも、産業を通して地域を見ることが出来ているわけです。都会でも同じなんじゃないかと思えます。違う視点ではあっても、地域を見る力っていうのを大学が今付けていかないと地域の教員として成長できないのではないかと考えています。愛知の場合でも大体6年で異動していきまいますから、結局地域に根差さない教員、次から次へと異動していく教員であって、学校を創ることが視野に入らないのではないかと思います。最近の統廃合の問題を見て思うことです。大学に課せられているのは、地域をどういうふうに学んで、地域をどう見ることが出来るのか、何かを発見出来る教員を育てるとというのが、大学の仕事かなというふうに今思っています。

もう1点は、学生同士の関わりということ。教職大学院はそう人数も多くないということもありますので、院生授業という90分のうち60分は院生に任せるという授業を、僕は2科目持っています。そうすると、4人か5人の院生のグループが授業構成のために凄く考えるんです。例えば、カリキュラムの構成で1章をどう授業を組むかってことを考えるわけです。そこで生まれた関係っていうのは、僕は、院生が何かあったときに、お互いの関わりを作っていくことになります。特に教職大学院の院生は、すぐ学校現場に出て行くことが前提になっていますので、学校での同僚性を創っていくきっかけにもなります。教材研究とか授業研究を通して、同僚性を創っていくことに、なるべく授業の中で近づきたいと思っています。十分な成果が上がっているかどうかというところは、修了した学生を見ないと分からないですけども、ただそういう努力というものが、今、大学に必要なんだろうと思っています。こうしたことでも、へき地教育研究で学んだことの一つ一つは、やはり学校を創るという基本である、同僚性であるとか自立性であるとかということに繋がっていく大きな要素になっていると考えています。

#### 研究協議司会：廣田

ありがとうございます。それでは、川前先生どうぞ。

#### 川前

私の方からは、今日キーワードとしては地域理解というものも出たと思うんですけども、このへき地校体験実習を通して学生達が地域に入ることで、新たな学びを得て共感す

るっていう気持ちと、他者理解を深めていくっていうことと同時に、自己理解をまた更に深めていくというような実習になっているのかなというふうにも感じています。

統廃合の話も出ましたけれど、この北海道のエリアを広く捉えたときには、年々数十校が統廃合をされていきます。そういった中で、このへき地校体験実習を受け入れて下さっている実習校も、統廃合で無くなっている場合もあります。そういった中で、大学がこの協力校をいかに増やしていけるかってことも大学としての課題になるんですが、やはり大学の教員も地域に出向いていくってことも求められているのが、この北海道の地域性なんだろうというふうにも思っています。今回色んな大学にも報告頂いて、学生さん達と交流してもらおうということが1つのねらいで、この連携大学の先生方と相談しながら、今日のこの場を設けさせて頂いたんですが、それぞれの皆さんが素敵な表情で、実習の成果を発表して下さったのがとても印象的でした。こういった場がたくさんあることも1つの多様な実習をお互いが理解し合う場になっていくし、恐らくきっと、もっと色んなリクエストがあると色んなことを大学がきっと考えてくれるのかなというふうにも考えておりますが、たまたま巡り合わせたこの4大学で、1つのへき地小規模校の色んな実践から今日のこの場があったっていうことに感謝したいなと思っています。また多様性という部分では、もっと様々なボランティア活動ですとか、様々な実習が各大学でなされているはずなので、そこでの学びということも私達が共有していく必要がこれからはあるだろうということで、終わらせて頂きます。

#### 研究協議司会：廣田

ありがとうございました。多様な実習の豊かな実りの一端が示されたかなと思っておりますが、多分皆さんまだ不全だと思えます。フォーラムでいえばこのHATOプロジェクトは今年で終わりではございません。来年また今出された課題を踏まえて、色々議論をしていきたいと思っております。実は不全と言いますと、私も言いたいことはたくさんあるんですが、これ以上言うと時間が押し迫っております。その思いを胸に、学生さんも次に何を考えるかということをお願いしながら、今回の研究協議を閉めさせて頂こうと思えます。ありがとうございました。

それでは総合司会の方にバトンタッチ致します。

#### 総合司会：中川

それでは最後に、へき地教育研究支援部門の部門長であります、八木修一部門長に閉会の挨拶を頂きます。よろしくお祈りします。

#### 閉会あいさつ

八木 修一（へき地教育研究支援部門長）



〔閉会挨拶 八木修一〕

本日朝早くから、そしてこの時間まで、長時間に亘って学生さんの報告、発表や更には研究協議ということで、たくさん成果があったのではないかと、こんなふうに思います。大変ご苦勞様でございました。そして、ありがとうございます。実は昨年のこのフォーラム、北海道教育大学の3キャンパスの報告で終わってございました。そうしましたら先程の馬野先生や鉄矢先生や中妻先生の方から、このHATOの連携は私達教員の連携だけでなく、学生の連携も必要なのではないかと、というようなことから今日の日を迎えました。多分、後からアンケートも書いて頂くわけですが、成功したのではないかと、こんなふうに思います。学生さんの皆さんの発表等を聞いていますと、北海道のへき地実習を他の3大学の学生さんにも良く分かってもらったし、また北海道教育大学の学生はいわゆる多様な実習があって、それぞれ学びをしてるんだってことが分かったことも、これはまた勉強だなというふうに思います。しかも今日のこのフォーラムは、先生方と学生が混じって色々な協議をやる、これは学会に行ってもそんなことはありません。簡単に言えば、珍しい発表会だったというかフォーラムだったというふうに自負しているところでもあります。今日は、講評を頂きました、十勝のへき地複式教育連盟の役員でもあり、またへき地校体験の実習協力校であります、原見校長先生にもご助言を頂きました。また、北海道立教育研究所の鈴木部長からもご助言を頂きました。何故このお2人に来て頂いたかと言いますと、十勝と言いますと釧路の隣の管内ですが、ここと釧路校と、いわゆる連携をしながら十勝のへき地の方に、本学教員でいわゆる教科教育法の先生方にも出向いて、お互いに勉強会をやっている。昨年は全道のへき地教育研究大会、現場にいる先生方の全道大会があったんですが、それが十勝でありました。そんなことを含めて原見校長先生に来て頂きました。道研の鈴木部長さんには、実は去年の11月にこのへき地部門と道研の指導主事と、へき地教育のことについて勉強会をしましよと開催しました。いずれにしても、大学にとっては、いわゆる現場との連携、更にはこういうような行政との連携、これを図りながら、いわゆる学生の教育のためにはど

うあればいいのか、こういうようなことをやっているところでございます。

また、本学にはへき研部門があるんですが、先程から質問もありました、生涯学習・地域連携部門というのもあって、今日部門長の今先生も先程から質問をしておりまして、それから学校教育研究支援部門の方も杵淵部門長さんも来て、3部門あるんですが、お互いに情報を収集しているといったところでございます。また私は教職大学院の方に身を置いているんですが、今日は参加者の中には、教職大学院の旭川校の笠井先生もお見えになっておりまして、学校経営コースで私も一緒にやっているんですが、へき地教育を取扱っております。皆さんの取り組みの情報を知りたいということで来て頂きました。また開催地の釧路校からは、先程質問して頂きました玉井副学長までお見えになったり、押田事務長さんまでここにお見えになり、大変期待されているフォーラムでもございます。今日は本当に4大学の学生と交流が出来たことは、極めて良かったな、こんなふうにも思っております。

最後になりましたが、長時間にわたって色々と発表、並びに協議、交流をして頂いたことに改めて感謝をし、お礼の言葉と致したいと思います。本日は誠にありがとうございました。

#### 総合司会：中川

以上を持ちまして、へき地小規模校教育フォーラムを終了致します。本日は長時間にわたりご参加頂きまして、ありがとうございました。